

特別支援教育研究論文集

—令和5年度 特別支援教育研究助成事業—

研究協力:独立行政法人国立特別支援教育総合研究所

「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの実現
—6つの取組から新たな領域の専門性を身に付ける!—

福島県立相馬支援学校

研究代表 校長 植田 貴子

令和6年3月

公益財団法人みずほ教育福祉財団

目 次

要旨	1
第1章 研究の背景と目的	2
第1節 研究の背景	2
1 教師を取り巻く教育情勢の変化	2
2 福島県立相馬支援学校の取組	3
第2節 研究の目的	4
第2章 研究の内容と方法	5
第1節 研究の内容	5
第2節 研究の方法	5
第3章 結果と考察	7
第1節 研修に関する教員アンケート	7
1 アンケートの実施	7
2 アンケートの結果と考察	7
第2節 校内研修6つの取組の実践と分析	15
1 単元案の取組	15
2 単元研究会の取組	19
3 教師寺子屋の取組	23
4 O J L研修会の取組	27
5 個人で学べる環境整備	31
6 オンラインコンテンツの活用	35
第4章 研究のまとめ	38
第1節 総合考察	38
1 「新たな教師の学びの姿」と校内研修との関連の整理	38
2 校内研修の取組の要点と配慮事項	40
第2節 今後の取組に向けて	41
1 本校の校内研修の課題	41
2 研修体制に関する課題	41
引用文献・参考文献	42
謝辞	43
巻末資料	44

要旨

本研究は、学校における校内研修に焦点を当て、「新たな教師の学びの姿」の実現に向けた研修の在り方について考察する実践研究である。研究の背景としては、令和4年度に教員免許更新制度が発展的解消となり、新たな研修制度が開始されたことが挙げられる。新たな研修制度に伴い、国や各地方自治体、各学校現場は、研修体制の整備に向けた具体的な取組と課題の整理が求められている。本校においては、カリキュラム・マネジメントの一環として校内研修の整備を進めてきたところであった。そこで、本校各教員の研修状況の全体像を把握するとともに、校内研修の各取組について検証し、「新たな教師の学びの姿」の在り方について研究することとした。

研修に関する教員アンケートを実施し、過去1年間の研修状況や本校校内研修に関する意識を調査した。その結果、約1～3割の教員は職務研修以外にも自ら研修の場を作って学んでおり、それ以外の教員は職務研修のみが研修の場となっていることが推測された。また、本校の校内研修の取組について、気軽に参加できる雰囲気や教員ニーズに応じた内容や方法の設定により教員から高評価を得ている状況も分かった。さらに、自主研修によるオンラインコンテンツの活用について、約6割の教員に経験が無いことが分かった。このことから、本校校内研修のよさを生かした協働的な学びの充実を図るとともに、個々のニーズに応じて学ぶことのできる環境整備が必要であると考え、校内研修の取組に生かすこととした。

また、本校の特徴的な6つの取組の事例について取り上げ、改善を図りつつ検証と考察を行った。「1. 単元案の取組」では、授業づくりと学習評価に注力できるカリキュラム・マネジメントとシステムづくりの重要性を確認した。「2. 単元研究会の取組」では、任意参加、対話、ファシリテーションの考え方や技術等の重要性を確認した。「3. 教師寺子屋の取組」では、多様な研修内容、ニーズに応じた学び、ワークショップ型や対話の場の重要性を確認した。「4. 0JL研修会の取組」では、心理的安全性やリーダーシップ等職場風土の重要性を教員間で共有することの重要性を確認した。「5. 個人で学べる環境整備」では、研修資料の整備とICT活用の重要性を確認した。「6. オンラインコンテンツの活用」では、オンラインコンテンツの情報提供や校内研修の機会、スキルに応じたサポート体制の重要性を確認した。

研究のまとめとして、「新たな教師の学びの姿」と校内研修との関連を整理し、校内研修の取組の要点と配慮事項をまとめた。中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）令和3年11月15日」に示された「新たな教師の学びの姿」のキーワードを引用し、キーワードごとに要点の整理を行った。

校内研修の要点と配慮事項については、授業づくりと学習評価に注力するための環境づくり、自律性と主体性の尊重、対話と学び合いを促す場と手立ての工夫の3点にまとめた。また、今後の取組に向けた課題として、持続可能なシステムづくり、個々の探究的な学びのさらなる充実、個々の目標設定と研修の選定の在り方、特別支援学校教員向けの学習コンテンツの充実、個別最適な学びの仕組みと時間の確保を挙げた。

キーワード：新たな教師の学びの姿、特別支援学校における校内研修、教師を支える環境整備

第1章 研究の背景と目的

第1節 研究の背景

1 教師を取り巻く教育情勢の変化

(1) 教員免許更新制度の発展的解消と新たな研修制度

令和4年5月18日、「教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律（令和4年法律第40号）」が公布され、この改正に伴う政令の一部改正、省令及び告示が令和4年6月21日に公布された。これにより、平成21年度から導入されていた教員免許更新制が発展的解消となり、新たな研修制度が開始されることとなった。新たな研修制度では、公立の小学校等の校長及び教員の任命権者等による研修等に関する記録の作成並びに資質の向上に関する指導及び助言等に関する規定が整備され、学校現場や個々の教師のニーズに応じた研修体制づくりが求められるようになった。文部科学省は、新たな研修制度の実施に当たり、「新たな教師の学びの姿」として、教師の個別最適・協働的な学びの充実を通じて主体的・対話的で深い学びを実現するという方針を示しており、国や各地方自治体、各学校現場は、具体的な取組と課題の整理が求められている。

(2) 「令和の日本型学校教育」の構築

中央教育審議会『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現～（答申）令和3年1月26日（以下、令和3年答申）では、2020年代を通じて実現を目指す学校教育について理念と方策が示された。主な方向性としては、学習指導要領の着実な実施とICTの効果的な活用を基盤に、個別最適な学びと協働的な学びの充実を図り、主体的・対話的で深い学びのより一層の実現を図ることである。また、こうした「令和の日本型学校教育」の構築に向けた目指す教職員の姿として、「学び続け、子供一人一人の学びを最大限に引き出す教師」、「質の高い教職員集団」、「新時代の学びを支える環境整備」等の必要性についても示されている。

(3) 「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿

令和3年答申に続いて、中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて（審議まとめ）令和3年11月15日（以下、令和3年審議まとめ）では、「令和の日本型学校教育」の実現に向けた現職教育の在り方が示された。

令和3年審議まとめには、「新たな教師の学びの姿」に関わるキーワードとして、「学び続ける教師」、「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」、「個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び」、「適切な目標設定・現状把握、積極的な『対話』」、「質の高い有意義な学習コンテンツ」、「学びの成果の可視化と組織的共有」、「デジタル技術の活用」が示されている。示された「新たな教師の学びの姿」には、教師のあるべき姿勢を含めた普遍的なものから現代的な課題に対応するためのものまで幅広く整理されている。学校現場においては、すでに取り組んできたこと、新たに整備しなければならないこと等を明確にし、研修体制を見直すことが求められる。

(4) 教師の個別最適な学びと協働的な学び

令和3年審議まとめに続いて、中央教育審議会『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）令和4年12月19日」には、現職教育だけでなく、教師の養成・採用も含めた幅広い内容が示された。

本答申では、「教師の学びの姿も、子供たちの学びの相似形である」とし、個別最適な学び、協働的な学びの充実を通じて、「主体的・対話的で深い学び」を実現することが重要であると述べられている。特に、教師の学びの内容の多様性と、自らの日々の経験や他者から学ぶといった「現場の経験」も含む学びのスタイルの多様性を重視することや、「理論と実践の往還」の手法による授業観・学習観の転換が必要であること等が強調されている。このことは、学校現場の日々の実践や校内研修の在り方と大きく結びつくものであり、「新たな教師の学びの姿」の中核として、校内研修の見直しと改善が求められていると考えられる。

2 福島県立相馬支援学校の取組

(1) 福島県立相馬支援学校（以下、本校）の概要

本校は、福島県浜通り北部にある県立の特別支援学校（知的障害）であり、児童生徒104名、職員75名の県内では中規模の学校である。小学部、中学部、高等部が設置されており、知的障害特別支援学校の教育課程を基盤としつつ、肢体不自由者等を含む重複障害学級や訪問学級を有している。

本校は、令和2年度に相馬市から南相馬市に校舎移転をしており、それを機に、学校教育目標と教育課程の抜本的な見直しを進めてきた。学習指導要領（平成29年／31年告示）が、令和2年度から完全実施となることも踏まえ、「学習指導要領の着実な実施」を軸に学校で育成を目指す資質・能力を明確にするとともに、その資質・能力を育成するためのカリキュラム・マネジメントの在り方について研究を進めてきた。

カリキュラム・マネジメントの中核として進めたのが、「知的障害者に対する教育を行う特別支援学校の各教科（以下、知的障害各教科）」の指導の在り方と学習評価を明確にするための「単元案」の作成と実施である。「単元案」は、単元で育成を目指す資質・能力、単元展開、個々の学習評価を整理するとともに、授業者が日々の授業で活用できる形式にした学習指導案である。「単元案」を作成し実施することによって、育成を目指す資質・能力に即した学習評価が蓄積され、学習評価に基づいた授業改善や教育課程の改善を図ることを目指した。

カリキュラム・マネジメントの実施に当たっては、仕組みをつくるだけでなく、授業者自身が、「単元案」を作成する意味に気付き、学習評価を踏まえて授業改善を行ったり、カリキュラムの改善に参画したりすることが必要である。本校では、カリキュラム・マネジメントの一環として、教育課程の改善とともに、校内研修の見直しと改善を同時進行で行ってきた。

(2) 校内研修の取組について

本校の年代構成は、20代、30代の教員が全体の約7割弱を占め、教職経験年数が少ない教員も多い。そのため、障害のある児童生徒の実態把握や授業に関する基礎的な内容に関するニーズが

高い。一方、経験年数の多い教員は、学習指導要領の改訂点を踏まえた指導の在り方や ICT の活用に関する新しい教育課題に関するニーズが高くなっている。

本校の主な校内研修は、日頃の授業について学び合う場としての「単元研究会」や「グループ単元研究会」、校内人材を生かして学び合う「教師寺子屋」等がある。また、研修資料の整備や校外研修、オンライン研修の案内等、教師が個々で学べる環境整備にも努めてきた。また、組織と個人の成長に関する知識と理論を学ぶための「OJL 研修会」を毎年企画し、個人だけでなく教職員集団としての在り方について学びを続けているところである。

令和 2 年度の校舎移転から約 4 年が経つ。これまで実践を積み重ねてきた校内研修の取組を振り返り、「令和の日本型学校教育」の実現に向けたさらなる改善に取り組んでいきたいと考えている。

第 2 節 研究の目的

本研究の目的は、『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿』について、特別支援学校の校内研修における具体的な取組とその要点を整理するとともに、校内研修及び教師の研修体制に関する課題と今後の方策を明らかにすることである。

第 1 節で示したように、本校がこれまで構築してきた校内研修の取組は、『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿』と重なる部分が多いと考えるが、検証や課題の整理については不十分である。

そこで本研究では、改めて「新たな教師の学びの姿」という視点に立って本校校内研修の全体像を見直すとともに、校内研修を含めた研修体制について、教師側の視点に立った検証と課題の整理を進めていきたい。

特に、教師の個別最適な学びと協働的な学びを目指した具体的な取組の検証を通して、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて、「新たな領域の専門性を身に付ける」等、教師一人一人の強みを伸ばすことのできる研修体制はどうあればよいか、研究を深めたいと考える。

第2章 研究の内容と方法

第1節 研究の内容

1 「新たな教師の学びの姿」と校内研修の取組の関連の整理

『令和の日本型学校教育』を担う新たな教師の学びの姿について、本校校内研修の具体的な取組との関連を整理するとともに、今後の校内研修の要点や配慮点を考察する。

2 校内研修の課題と今後の方策の明確化

本校の校内研修の取組の検証を通して、実施上の改善点や新たに整備する必要がある点を明確にするとともに、今後どのような取組が求められるか、具体的な方策について考察する。

第2節 研究の方法

1 研修に関する教員アンケート

研究に当たっては、これまでの校内研修の取組や本校教員の研修状況を把握するための教員アンケートを実施する。教員アンケートは、本校の校内研修に関わっている教職員全員に実施し、過去1年間の研修状況や本校校内研修に関する意識を調査することによって、研修の現状や課題、校内研修の全体像を整理することができると思う。

教員アンケートで得られた結果と考察をもとに、「新たな教師の学びの姿」を踏まえながら、校内研修の各取組に反映させるとともに、校内研修の配慮点や今後の改善策に生かすようにする。

<教員アンケートの概要>

【対象】相馬支援学校教職員（校内研修に関わっている教諭・講師・実習助手）55名

【内容】①学部、年代、本校勤務年数等の基礎情報、②過去1年間の研修の状況、③単元案の活用状況、④校内研修・校外研修に関わる教員の意識、⑤自主研修におけるオンラインコンテンツの活用状況

【実施方法】Google Formを使用したアンケート（選択式・記述式併用）

2 校内研修6つの取組の実践と分析

本校校内研修について、特徴的な6つの取組の事例（表1）について分析を行う。その際、受講している教師の感想、インタビュー等をまとめるとともに、「新たな教師の学びの姿」のキーワード（表2）との関連を整理することで、今後の校内研修の要点や配慮点について考察する。

表1 校内研修6つの取組

<校内研修6つの取組>

①単元案の取組、②単元研究会の取組、③教師寺子屋の取組、④OJL研修会の取組、⑤個人で学べる環境整備、⑥オンラインコンテンツの活用

表2 新たな教師の学びの姿（令和3年審議まとめ）

キーワード	内容（本文から一部抜粋。筆者による。）
ア 学び続ける教師	<ul style="list-style-type: none"> ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル
イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢	<ul style="list-style-type: none"> ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築
ウ 個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び	<ul style="list-style-type: none"> ・教師自身が、新たな領域の専門性を身に付ける等、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて強みを伸ばすことが必要 ・他者との対話や振り返り等の機会を教師の学びにおいて確保する等、協働的な教師の学びも重視される必要がある
エ 適切な目標設定・現状把握、積極的な「対話」	<ul style="list-style-type: none"> ・具体的な目標の達成に向けた体系的・計画的な実施 ・適切な目標設定（「将来の姿」）と現状（「現在の姿」）の適切な把握 ・任命権者や服務監督権者・学校管理職等と教師の積極的な「対話」
オ 質の高い有意義な学習コンテンツ	<ul style="list-style-type: none"> ・明確な到達目標と適切な内容を備えていること ・体系性をもって位置付けられ、レベルも整理されていること ・質の高い学習コンテンツが豊富に提供されていること ・質保証の仕組みが適切に機能していること ・各学習コンテンツをワンストップ的に集約・提供するプラットフォームが存在していること ・知識伝達型の学習コンテンツに留まらない自らの経験や他者から学ぶといった「現場の経験」を含む学びが提供されていること
カ 学びの成果の可視化と組織的共有	<ul style="list-style-type: none"> ・学びの成果が可視化され、個人の学ぶ意欲を喚起できていること ・学びの成果が組織において積極的に活用されていること ・教師の学びを全国的な観点から質が保証されたものとして証明する仕組みが構築されていること
キ デジタル技術の活用	<ul style="list-style-type: none"> ・学習履歴の管理や学びの成果の可視化等を電子的に行うこと ・豊富で質の保証された学習コンテンツをいつでもどこでもオンラインで学ぶことができるようにすること

※ ア～キの記号は、内容整理のために筆者が追記したもの。

第3章 結果と考察

第1節 校内研修に関する教員アンケート

1 アンケートの実施

- (1) 期 間 令和5年6月14日(水)～21日(水)
- (2) 対 象 相馬支援学校教職員(校内研修に関わっている教諭・講師・実習助手)55名
- (3) 質問内容 校内研修・校外研修・自主研修に関すること等
- (4) 実施方法 Google Formを使用したアンケート(選択式・記述式併用)
- (5) 回 収 55件/55件(回収率100%)

2 アンケートの結果と考察

(1) 基礎情報

アンケート対象者の所属学部、年代、本校の勤務年数は、表3、表4、表5の通りである。所属学部は、高等部、小学部の順に多く、中学部が高等部の半数程度である。年代別では30代が43.6%と最も多く、全体の約3分の2が30代以下となっている。勤務年数については、2～4年目が約半数であり、1年目と合わせると5年未満である教員の数は約4分の3となる。以上のことから、本校は若手教員や勤務年数が短い教員が比較的多い学校であるといえる。

表3 所属学部

所属学部	n=55
小学部	19 (34.5%)
中学部	12 (21.8%)
高等部	24 (43.6%)

表4 年代

年代	n=55
20代	13 (23.6%)
30代	24 (43.6%)
40代	10 (18.2%)
50代	8 (14.5%)

表5 本校での勤務年数

勤務年数	n=55
1年目	15 (27.3%)
2～4年目	27 (49.1%)
5年目以上	13 (23.6%)

(2) 研修の状況について

質問1～4は、個人の研修状況や主体的な参加の意識、主体的に参加するための条件、学校の業務を進める上で困っていることについて質問した。現在の研修状況を把握するとともに、研修に対する意識やニーズを把握することを目的とした。

質問1では、本校教員が1年間で行った研修の大まかな種類と、その人数の割合等を把握できた(図1)。授業研究(90.9%)、校内で開催した自由参加の研修会(74.5%)や外部講師による講演会(80.0%)等、校内で企画開催されたものについては、ほとんどの職員が参加していることが分かった。県教育委員会主催の研修会(14.5%)、教育センター(9.1%)、特別支援教育センター(27.3%)は、校内で参加者を選定して行うものであり、約1～3割が参加している。書籍・雑誌(30.9%)、Webサイトの閲覧(29.1%)、自主研修による講演会・セミナー参加(21.8%)、入会している外部団体(12.7%)、有志団体による学習会(10.9%)は、自主研修となる。約3割が自主研修をしており、約1割が外部団体等に所属して自主研修を行っていることが分かった。

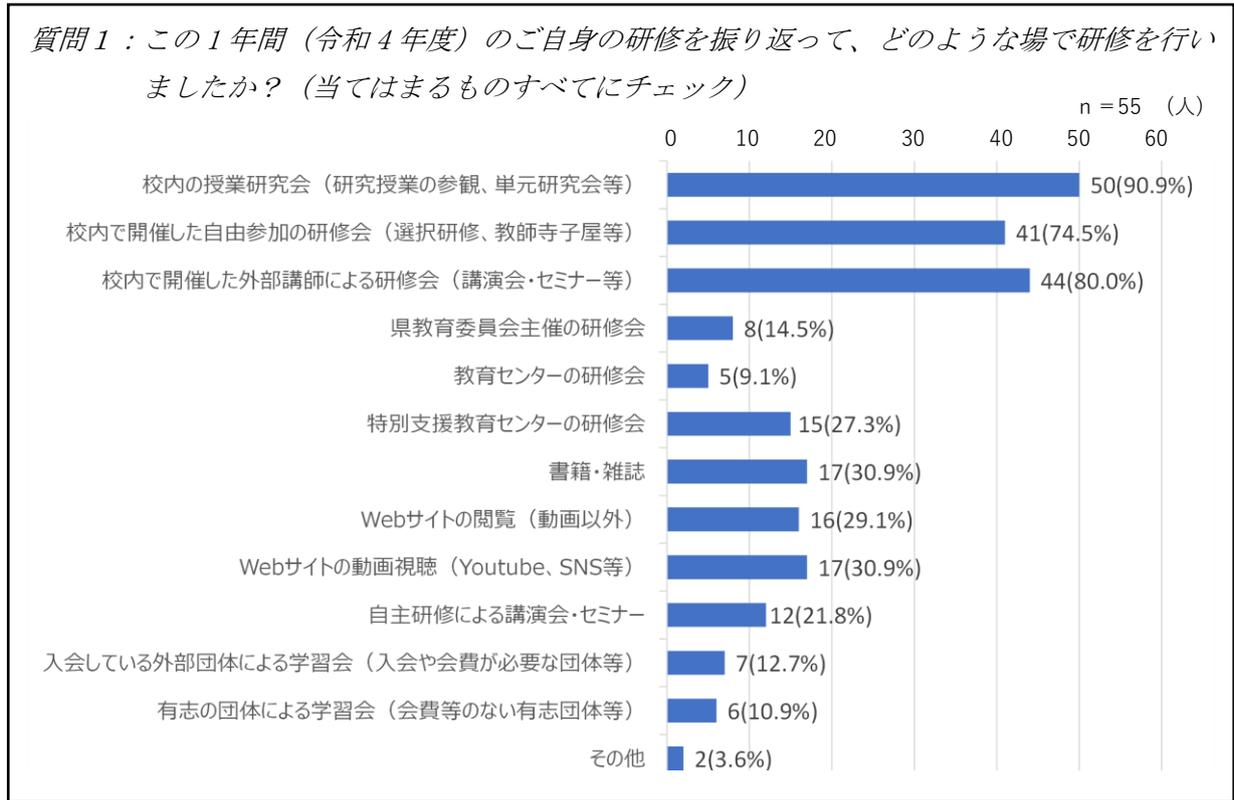


図1 質問1の回答

校内で開催される研修は、いわゆる職務研修であり、全員が参加する研修である。100%の回答でない理由は、何らかの事情で参加できなかった若しくは、質問内容についての誤認があったことが推測される。校外研修については、職務上の研修として、経験者研修に該当する教員が参加する機会が多いが、一部は自ら希望して参加しているものもある。

校内研修や校外研修等の職務研修については、個々の教員が主体的に研修に参加しているかどうかは把握できないが、約1～3割の教員は、職務研修以外にも自ら研修の場を作り、学ぼうとしていると考えられる。

それ以外の教員については、職務研修が主な研修の場となるため、主体的に参加できる研修内容や、勤務時間内で自ら学べる環境整備の充実が重要であると考えられる。

質問2では、研修に主体的に参加しているかについての自己評価を質問した。「研修に主体的に参加しているか」そう思う（20.0%）、ややそう思う（56.4%）の4分の3程度がおおむね高い評価をしている。低い評価は1件もなく、どちらでもない（23.6%）も全体の4分の1程度であった（図2）。

「どちらでもない」と回答した23.6%は、自信を持って学んでいると回答していない状況から、現状の研修体制や学ぶことについて、何らかのつまづきや滞りを感じているのではないかと考える。このつまづきや滞りの要因を明らかにし、取組や配慮に生かしていくことが、研修意欲の向上につながるのではないかと考える。

質問6では、学習評価を行う際の単元案の活用状況を調査した（図6）。よく活用している（23.6%）、時々活用している（25.5%）が49.1%であり、授業における活用（図5）よりは下回るものの、おおむね半数が学習評価の際の活用ができています。たまに活用している（41.8%）とほとんど活用していない（9.1%）を合わせると50.9%であり、授業での活用に比較して、単元案を使った学習評価は、あまり取り組めていない状況がうかがえた。

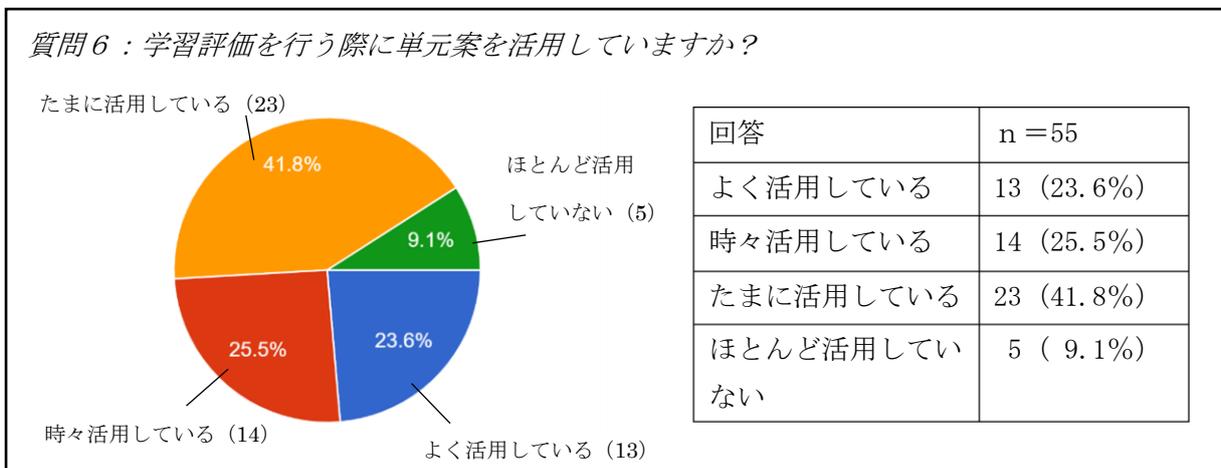


図6 質問6の回答

(4) 校内研修・校外研修に関わる教員の意識

本校の校内研修、校外研修について、教員はどのように捉えているのか、教員の意識を把握するため、本校の校内研修、校外研修についてそれぞれ質問した。

質問7-1では、校内研修に関する意識調査をした（図7）。とてもよい（63.1%）、おおむねよい（34.5%）が、98.6%であり、校内研修の内容や方法について高い評価が得られている。

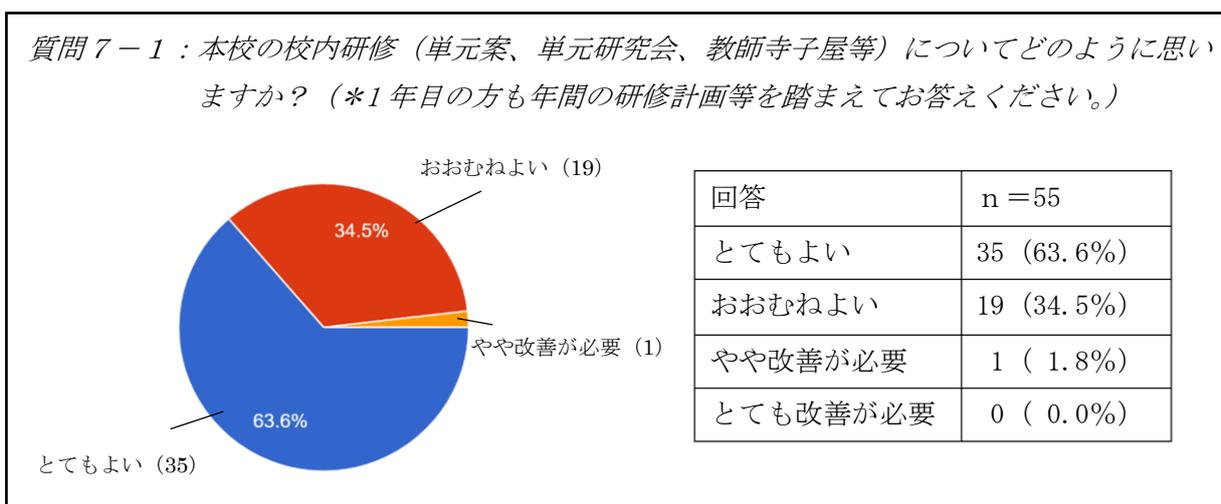


図7 質問7-1の回答

質問7-2では、研修に関する要望を調査した（図8）。気軽に研修できる雰囲気を継続することや研修内容及び方法についての工夫が挙げられた。

質問7-2：本校の校内研修（単元案、単元研究会、教師寺子屋等）について要望があれば教えてください。

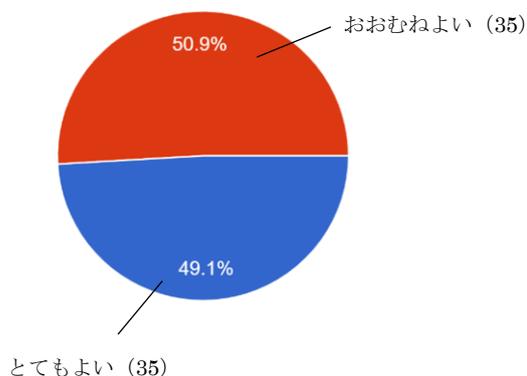
（回答）

ICT 機器を使った例を挙げてほしい／理科や農業についての講座／簡略化できるのであれば／単元案の使い方の事例について、教えてほしい。先生方によって使い方が違うと思うので。／教師寺子屋は、日々の授業を行う中で参考になることが多い。／ノー残業デーの水曜日はできれば避けてほしい。／気軽に参加できる雰囲気をつけて欲しい。だれでも発言できる！／単元案を作成した後に、担当者間の共通理解が図れる場があるとよい。／直接授業を参観できないことが多いので、授業の動画を誰でも見られるようになっていると良いかもしれない。／全体での説明会では理解に至らないこともあるが、寺子屋での少人数で行う研修だと分からないことをたずねやすい。また参加させていただきたい。／単元案に付随して、指導案の作成の仕方。／他の会議や緊急案件が入ると参加できないことがある。内容をあとからでも振り返れるよう、要項等は参加者以外にも配付または閲覧できるようにしていただくと助かる。（単元研究会以外で。）／本校への勤続年数や教職の経験年数等が一人一人違うため、単元案や授業づくり等の理解について差があると感じている。寺子屋で行っても行っているが、単元案の作成について相談できるようにしたり、モデルとなる教員からどのように授業づくりを行っているか聞いたりする機会が定期的にあると良い。また、参加する人は希望制になっているが、主事等で推薦して参加するような仕組みがあると良いと思う。／教師寺子屋が講義スタイルなのが少し残念に感じています。座談会や個別相談会みたいな感じで気軽に聞ける・気軽に教えられるスタイルだといいのにな…と、自分が ICT 関係の講師側になったときに思いました。／単元案について：単元案の簡易バージョンがあると、ハードルが下がり新しく来た先生方も導入口としてはとっかかりやすいのではないかと思います。／単元案の最新版はどれなのか。／勝手に単元研等を通して、授業をブラッシュアップ！これでいいのかな？と単元案や授業への不安を軽減できると思います。気軽に開いてほしいです。／基本的に自由参加なのが良いと思います。

図8 質問7-2の回答

質問8-1では、校外研修に関する意識調査をした（図9）。とてもよい（49.1%）、おおむねよい（50.9%）が、100%であり、校外研修の周知方法について高い評価が得られている。

質問8-1：本校の校外研修の機会（研修の案内等）についてどのように思いますか？



回答	n = 55
とてもよい	27 (49.1%)
おおむねよい	28 (50.9%)
やや改善が必要	0 (0.0%)
とても改善が必要	0 (0.0%)

図9 質問8-1の回答

質問 8-2 では、校外研修の機会に関する要望を調査した (図 10)。特に大きな問題はなく、継続が求められていることが推測される。教育センターの専門研修等に参加しやすくなる工夫や Chat 機能等 ICT を活用して、実施要項等後からいつでも検索できるようにする等の工夫等の要望が出されている。

質問 8-2 : (記述) 本校の校外研修の機会 (研修の案内等) について要望があれば教えてください。

(回答)

今のままで良い。／一年目なので、いろいろな研修に参加したいと考えています。／悉皆研修以外では参加希望を出しにくいこともあるので、適切な参加人数や参加が決まっている人等について事前に提示していただきたい。／研修の掲示板を活用していて分かりやすいと思う。／回覧や掲示板 (ホワイトボード) 等、紙媒体で示すよりも Chat で流していただけると、もう一度研修の開催要項等を確認したいときにいつでもデータで見られるので個人的にはありがたいです。／校内チャットで随時教えてくださいとありがたい。／チャットで要項を流していただくと後で確認ができるのでありがたいです。

図 10 質問 8-2 の回答

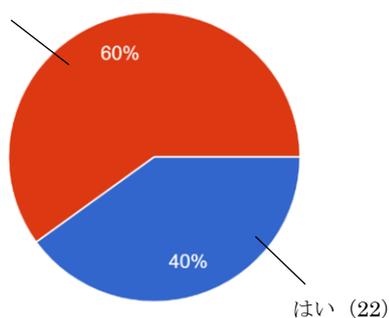
(5) 自主研修におけるオンラインコンテンツの活用状況

近年の ICT の進展により、従来の図書や研修資料の活用の他、インターネット上の学習コンテンツを利用したり、オンライン動画を視聴したりする教員も増えている。本校における現状を把握するため、オンラインコンテンツの活用状況について調査した。

質問 9-1 では、オンラインの動画コンテンツの利用経験について調査した (図 11)。「ある」が 40.0%、「ない」が 60.0%であった。動画コンテンツの利用経験がない人の方が多いことが分かった。

質問 9-1 : 自主研修において、オンラインの動画コンテンツを活用して学んだことがありますか?

いいえ (33)



回答	n = 55
はい	22 (40.0%)
いいえ	33 (60.0%)

図 11 質問 9-1 の回答

質問 9-2 では、おすすめの Web サイトや学習コンテンツについて調査した。YouTube の活用が多くみられ、NITS、教育センター等の知識・理論から、幼児向け動画等の教材の活用にも使用されている。また、プリント、ドリル等の参考になる教材データも利用されている。

質問9-2：これまで学んでよかったと思えるおすすめのWebサイトや学習コンテンツがあれば教えてください。(YouTube やSNS 等でもよいです。)

(回答) ※重複した内容があったため、一部を抜粋した。

- YouTube、Facebook、Twitter 等で「ICT 教育」と調べる。
- NHK for school 試してフシギ
- いばすた小学校チャンネル (小学校の全教科の動画が入っている)
- 昨年、理科で電気の学習をする際に YouTube を観た。参考になった。
- 特別支援教育センターHP、国立特別支援教育総合研究所 HP、YouTube で解説されている講義 (いじめ防止、知的障がいのある児童生徒の道徳の取り扱い) 等
- NITS や茨城県教育研修センター等の動画コンテンツにて基本情報を学んだり、インスタグラム等で作業療法士さんや他の支援学校、保育園、老人施設等で取り扱っている制作例やレクリエーション例等、自立活動的な課題で活用したりできる。
- 自分の知りたいことを YouTube で検索すると色々ヒットするので、自分の考え方にあった人の動画を参考にしている。
- すきまるドリル、ちびむす
- YouTube で Adapted Physical Activity を見る
- YouTube にある幼児向けの動画
- 「いまさら聞けない」シリーズのミニ講座。短時間で福祉系の概要をつかむことができよかったです。
- 主にインスタやコミュニティで活動されている「いるかどり」さんの教材データ集は、自活の課題を準備する上で時短になると思います。活用していました。
- Nits の動画はよく見ます。
- <https://www.sensei-no-gakkou.com/> ←先生の学校
- <https://www.apple.com/jp/education/k12/professional-learning/> ←Apple
- https://edu.google.com/intl/ALL_jp/ ←Google
- <https://www.microsoft.com/ja-jp/education> ←Microsoft

図 12 質問9-2の回答

(6) アンケートのまとめと今後の方針

本校の校内研修の取組は、校内の教員から高い評価を得ており、単元研究会や教師寺子屋等の定期的な研修に気軽に参加できる雰囲気や、教員のニーズに応じた内容や方法を設定できていることが高評価につながっていることが分かった。

一方、校務分掌の業務が大きな影響を与えていることも推測され、学校の業務改善を図りつつ、各教員が研修に専念できる仕組みづくりが必要であると考えます。また、教員の年代や教職経験等により、学びのニーズが多様化していることから、個々のニーズに応じて自主的に研修に取り組めるような学びの環境整備も重要になってくると考える。

これまでの取組のよさを生かし、単元研究会や教師寺子屋における対話や協働的な学びの充実を図るとともに、オンラインコンテンツの活用や校内における資料の共有等、個々のニーズに応じて学ぶことのできる環境整備が必要であると考えます。

第2節 校内研修6つの取組の実践と分析

1 単元案の取組

(1) 授業者が日々の授業で使う「単元案」

令和2～4年度の校内研究「単元研究会から資質・能力を育むための単元研究会からのカリキュラム・マネジメントの充実」において、カリキュラム・マネジメントの中核として開発されたのが本校独自の学習指導案様式である「単元案」である。

カリキュラム・マネジメントに当たっては、根拠に基づく授業づくりと学習評価及び指導改善のプロセスが不可欠である。授業づくりから学習評価及び指導改善までのプロセスを明確にし、教員間で共有するため、学習指導案の様式から見直すこととした。これまでの学習指導案の様式は、主に研究授業で使用されることを目的とした様式になっており、日常的に使用するには作成の負担が大きいものであった。また、表現の仕方等本質的ではない部分の議論になることが多かったため、研究授業や学習指導案の作成自体に抵抗感がある教員も少なくなかった。

そこで、新しい学習指導案の開発に当たっては、学習指導要領に示された内容をシンプルに押さえつつ、日常的に使える様式を目指した。学習指導要領は、教育課程の基準となるものであり、教育課程の編成や授業づくりの根拠となるものである。学習指導要領の改訂内容を踏まえた様式にすることで、経験則や慣習のみによる議論を避け、根拠を踏まえた議論が可能となると考えた。また、経験年数の少ない教員であっても、学習指導要領に示された各教科等の目標や内容を踏まえることで、指導のねらいを捉えやすくなり、授業づくりや学習評価に注力できるようになると考えた。

新しい様式の作成に当たっては、学習指導要領で示されている単元づくりのポイントを①～⑧に整理し(資料1)、これらのポイントを押さえると同時に、作成の負担が過重にならないように項目を精選した。名称を「単元案」とし、1単位時間の授業だけでなく、単元全体を見通した授業構想と学習評価を重視するというコンセプトを校内で共有できるようにした。

単元案1枚目(資料2)は、本校で育てたい資質・能力との関連を意識できるよう、学校教育目標や各学部の目標を明記するようにしている。また、単元の指導目標や評価規準等は、学習指導要領に示された内容か

学習指導要領で示されている単元づくりのポイント

- ① 本校の育みたい資質・能力から、教科等の資質・能力へのつながり
- ② 単元において育む資質・能力の明確化
- ③ 単元における評価規準と評価計画(いつ、どの資質・能力を育てていくのか)
- ④ 授業改善の視点(主体的・対話的で深い学びの単元構想における意図的な設定場面)
- ⑤ 子どもたちの学びの過程(習得、活用、探究)をデザイン
- ⑥ 単元間のつながり(教科内、教科等間)
- ⑦ 教科等横断的な視点に立った資質・能力を育む視点
- ⑧ 「何が身に付いたのか」観点別学習状況の評価と授業改善

資料1 単元づくりのポイント

相馬支援学校 単元案											
本校の学校教育目標											
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性									
基礎的・基本的な知識・技能を習得し、活用できる力	自ら考え、協働し、課題を解決していく力	自ら進んで考え、学ぼうとする力									
高等部											
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性									
自立と社会参加のために必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得し、活用できる力	自分の考えを持ち、他者を理解し、課題を解決していく力	自ら進んで考え、学ぼうとする力									
【資質・能力の育成のための教育活動として】											
理科 単元案	単元・題材名 「流れる水の働きと土地の変化」										
【単元・題材での目標】 知的障害者教科等編(上)(高等部) 理科1 段階B 地球・自然											
知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等									
流れる水の働き、気象現象の規則性についての理解を図り、必要な技能を身に付けるようにする。	流れる水の働き、気象現象の規則性について調べる中で、主に予想や仮説を基に、解決の方法を考える力を養う。	流れる水の働き、気象現象の規則性について進んで調べ、学んだことを生活に生かそうとする態度を養う。									
<table border="1"> <thead> <tr> <th>単元の目標</th> <th>知識・技能</th> <th>思考・判断・表現</th> <th>主体的に学習に取り組む態度</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>・流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり地盤をせたりする働きがあることを理解している。</td> <td>・流れる水の働きと土地の変化との関係について、予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。</td> <td>・流れる水の働きと土地の変化についての事物・現象に進んで調べ、学んだことを学習や生活に活かそうとしている。</td> <td></td> </tr> </tbody> </table>				単元の目標	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度	・流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり地盤をせたりする働きがあることを理解している。	・流れる水の働きと土地の変化との関係について、予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。	・流れる水の働きと土地の変化についての事物・現象に進んで調べ、学んだことを学習や生活に活かそうとしている。	
単元の目標	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度								
・流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり地盤をせたりする働きがあることを理解している。	・流れる水の働きと土地の変化との関係について、予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。	・流れる水の働きと土地の変化についての事物・現象に進んで調べ、学んだことを学習や生活に活かそうとしている。									
単元構想のためのメモ欄 ＊校庭を活用して実験に取り組む。 ＊トレイ、洗淨びん等を使った実験に取り組み、実体験を使って、災害で、前回の単元とのつながりも考える。 ＊予想、実験方法を考える、検証、結果、考察等の見方・考え方を働かせて授業が展開するように構想する。その際、授業の展開が上記の流れになるように、発問、板書等を事前に考え、生徒の思考が促れるようにする。 ＊各教科等の学習の文脈の中で、教科等横断的な視点に立った資質・能力(言語能力)が横断的に育成・発揮されること											

資料2 単元案1枚目(資質・能力の明確化)

ら転記して作成する（評価規準は、学習評価参考資料を踏まえて表現を一部変えて作成）。そうすることで、経験則や感覚による目標設定から、根拠に基づく目標設定ができるようにしている。また、「単元構想のためのメモ欄」を設け、単元指導の構想等何でも自由に記載できるようにしている。

【教科等横断的な視点に立った資質・能力】				
学習の基礎となる 資質・能力		現代的な諸課題に対応して求められる 資質・能力		相馬支援学校 ならではの力
言語能力	情報活用能力	問題発見・解決能力	感染症、肥満、運動不足等の自身の健康・安全に関する力の育成	自己理解・自己実現の育成
【何を、いつ、どのように】学んでいくのか？				
展開回数	知・技・態	思・判・表	主・体	横断的な力
第一次	1	○		●川の上流・中流・下流の様子を見ての様子の違いに気付く。 【目】：実際に身近な川を取り上げながら、川の上流や中流、下流によって、川の様子が違うことに気づき、これから調べて行こうとする見通しをもてるようにする。 【習得】
	2	○		●川のおよそ上流・中流・下流による違いをまとめる。 【目】：最初は、自分で調べた後、その後、友達とグループになって話し合う場を設けながら、気づきをグループ事にまとめていくようにする。 【活用】
第二次	2	○	○	●流れる場所と水の関係について話し合い、流れる水の動きを予想する。 【目】：写真等を使ったり、身近な校庭等の映像を使ったりしながら、どんな動きがあるのかを予想していくようにする。【目】：予想したことをどのように、検証していくのか、実験方法を考え、表現していく。 【活用】
	3	○	○	●斜面に水を流して、流れる水の動きについて調べる。 【目】：斜面に水を流し、流れる水にはどのような動きがあるのかを調べる。【目】：写真等を使ったり、身近な校庭等の映像を使ったりしながら、どんな動きがあるのかを予想していくようにする。【目】：予想したことをどのように、検証していくのか、実験方法を考え、表現していく。 【活用】
	4	○	○	●流れる水の動きについてまとめる。 ・流れる水にはどのような動きがあるのかを実験をもとにしてまとめることができる。準備物：実験セット、ワークシート ●学んだこととともに、川を観察し、流れる水の動きについて調べる。 ○川の水が地盤を流すと、川に災害が起きるのを予想する。 【活用】
	6	○	○	●流れる水の動きについてまとめる。 ○川の水が地盤を流すと、川に災害が起きるのを予想する。 【活用】
まとめ	8	○	○	●流れる水の動きについてまとめる。 ○川の水が地盤を流すと、川に災害が起きるのを予想する。 【活用】
【他の単元とのつながり】				
社会科	「過去の単元」7月 ○教科等横断的な教育内容の検討・考察	「現在の単元」9月 ○教科等横断的な教育内容の検討・考察	「今後の単元」10月 ○教科等横断的な教育内容の検討・考察	
総合	「我が国の国土と地形」 「南相馬市の防災について」			

資料3 単元案2枚目(単元構想)

【内容のまとまりごとの評価規準と観点別学習状況の評価】	
① 知識・技能 ② 思考・判断・表現 ③ 主体的に取り組む態度	観点別学習状況の評価
①知識・技能 ・流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 ・川の上流と下流によって、川原の石の大きさや形の違いがあることを理解している。 ・雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わる。増水より土地の様子が大きく変化する可能性があることを理解している。 ・観音、真砂などに関する初歩的な技能を身に付けている。	①知識・技能 ・実験の結果から「水の流れる力が強くなる」と土地を削る力が強くなるのではないかと考え結論を出すことができた。 ・川の上流は「川の流れる速く、幅が広がって大きい」、下流は「全体的に先手をきいて、小さく平べた」と考えるなど、上流、中流、下流の石の形の違いを理解することができた。 ・石原などの大雨時の川の映像を見て、「川が増水し中洲や河原なども川の一面になる」と答えるなど、土地の様子が変わることを理解することができた。 ・流れる水の動きを調べる実験において、比較検討するためには、変化させない条件として「山の傾斜」変化させる条件として「水の量」と考えるなど、条件を制御して実験を行うことができた。また、観察する時は、事実を客観的に見取る必要があることを理解することができた。
②思考・判断・表現 ・流れる水の動きについて調べる中で、流れる水の動きと土地の変化との関係についての予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。	②思考・判断・表現 ・流れる水の動きを調べる実験においては、川の水が増える大雨や台風学習の時には「土地が崩れやすくなり、川の幅が広がり、川の近くが流されてしまう」と想像を立てることができた。また、「砂で山を作ることは斜面と同じ」「初めは斜面の実験と同様に水を流し、その後水の量を増やして比べて考える」と実験方法を考えることができた。
③主体的に取り組む態度 ・流れる水の動きと土地の変化についての事象・現象に連んで関わり、学んだことを学習や生活に活かそうとしている。	③主体的に取り組む態度 ・実験の中で準備が整った川の様子から、水の量を増やすとカーブの部分が決壊するのではないかと考えた。カーブの部分に堤防が必要ではないかと考えたりすることができた。実際の川と関連付けながら川が増水すると「堤防を削ってしまえば川が氾濫し災害が起きてしまう」と実社会と結び付けて考えたりすることができた。
各教科等の学習の文脈の中で、これらの資質・能力が横断的に育成・発揮された姿 ・教科等横断的な資質・能力：問題発見・解決能力 ・実験の中から問題を発見し解決する力の育成を図っていく。 【評価】実験から、「川が増水すると、カーブの部分から決壊してしまう。だから土を盛って堤防を作る必要がある。」と考えるなど、問題を発見し解決しようとしていた。 ・教科等横断的な資質・能力：地域で起る災害等への緊急時に対応する力の育成 ・地域の真実に応じた各種災害に対する「緊急時に対応する力」の育成を図る。 【評価】下流に行くほど川幅が広がることが分り、さらに大雨などで増水すると川が決壊し危険が増すため、堤防が必要となる。だから下流に近い学校の近くの川は堤防が深いんだ。」と表現するなど、実社会と結びつけながら考えることができた。	

資料4 単元案3枚目(学習評価)

単元案2枚目（資料3）は、「何を、いつ、どのように学んでいくのか」が分かるように、単元展開や評価計画を記載する欄となっている。その際、主体的・対話的で深い学びの実現や習得・活用・探究の学びの過程のデザインを踏まえた学習活動や手立てを記入するようにしている。また、教科等横断的な視点に立った資質・能力との関連、他の単元とのつながり等の欄を設け、教育課程全体を意識できるようにしている。

単元案3枚目（資料4）は、単元の学習評価について文章で記入する欄である。左側には、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点の評価規準を記入し、右側には、学習状況を文章で記入するようにしている。また、教科等横断的な視点に立った資質・能力に関する内容も記録できるようにしている。

本校では、この「単元案」を使用し、学習指導要領の内容を着実に押さえながら、授業改善とカリキュラム・マネジメントを積み重ねてきた。

(2) 単元案を中心としたシステムづくり

令和2年度からの3年間の校内研究及び研修によって、単元案が浸透し、研究授業以外にも日頃の授業で作成したり、教師間で共有するための資料として活用したりする姿が見られるように

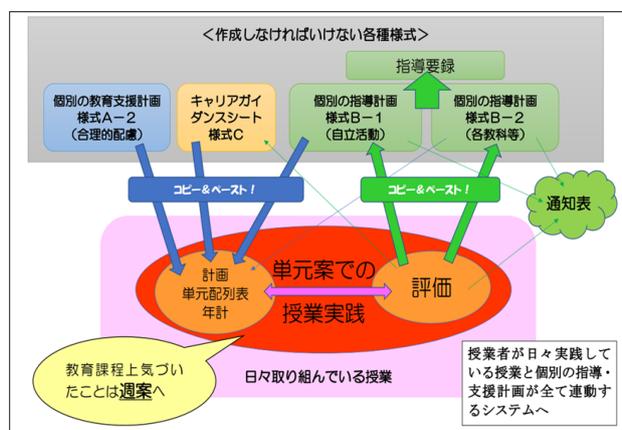
なっている。本章第1節「校内研修に関する教員アンケート」の結果にもあるように、現在は、本校の9割以上の教員が活用している状況である。単元案が浸透した要因としては、校内研修のほか、年間指導計画や個別の教育支援計画、個別の指導計画、週案等と単元案とが連動するシステムを構築してきたことが考えられる。

本校では、各教科等の年間指導計画に基づいた単元配列表を作成しており、カリキュラム・マネジメントのツールとして活用している。この単元配列表のデータと単元案のデータがリンクされており、単元の箇所をクリックすることで、すぐに単元案の様式が出てくるようになっている。過去の単元案にアクセスでき、過去の資料を参考に単元案を作成することができる仕組みになっている（資料5）。

資料5 単元配列表

また、個別の教育支援計画に記載された合理的配慮の内容を単元案に転記したり、単元案の学習評価を個別の指導計画の評価に転記したりする等、学校で作成すべき各種計画や評価と単元案が繋がる仕組みになっている（資料6）。

このように、単元案を中心としたシステムづくりを行い、カリキュラム・マネジメントを進めてきた。授業を行う教員にとっても、作成している各種様式と授業とのつながりが整理され、業務の効率化につながっている。



資料6 単元案と各種様式の連動

(3) 単元案に関するインタビュー

「単元案」について、複数の教師にインタビューを行い、次のような回答が得られた（表6）。

表6 単元案についてのインタビュー回答

インタビュー：単元案の取組をどのように感じているか（メリットや課題）。	
回答者	インタビューの回答（一部抜粋）
教員A（20代）	<ul style="list-style-type: none">・単元案を確認することで、今日の授業でどんな学びをさせたいか、プレずに指導できるようになった。・過年度の単元案があるので、参考に作成できるのがよかった。
教員B（30代）	<ul style="list-style-type: none">・単元案がないと逆に不安である。単元のねらいや展開を意識して計画的に指導できるようになった。・全部の単元で作成することは難しかった。
教員C（40代）	<ul style="list-style-type: none">・共通の様式があることで、教師間で共有できるのがよいと思う。・観点別評価が難しい。自分の評価が適切か迷う。

インタビューでは、単元案を作成・活用することで、授業のねらいをより意識できることや、単元構想の参考資料や教師間で共有するための資料としてメリットを感じている様子が見えられた。一方、全ての単元で単元案を作成することや学習評価の方法について課題が挙げられている。

単元を構想し、単元全体を見通して授業や学習評価を行うことは、授業を行う全ての教員に求められる技能である。しかし、教員それぞれのこれまでの学びや経験に委ねられる部分が多く、経験が少ない教員であれば当然不安は大きい。単元案は、授業づくりと学習評価の手続きについての基準を校内で共有するものであり、何をどのように進めればよいか分かることで、こうした不安の軽減になると考える。そして、教員が本来注力すべき授業づくりと学習評価に集中できるようにすることが大切であると考えられる。

(4) 「新たな教師の学びの姿」との関連

単元案の取組について、令和3年審議まとめ「新たな教師の学びの姿」のキーワードとの関連では、「学び続ける教師」「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」との関連を取り上げる（表7）。

よりよい授業を求め学び続けることが教師本来の姿であり、単元案はそれを実現するための手段の一つである。学習指導要領を踏まえることで授業の基礎・基本を確実にするとともに、授業づくりと学習評価の手続きを明確にし、授業の創意工夫に注力することができるようにすることが、「学び続ける教師」の基盤になると考える。

また、日々の授業づくりと学習評価に集中できる環境づくりが、教員一人一人の「主体的な姿勢」を促し、「継続的な学び」を支えると考えられる。そのためには、カリキュラム・マネジメントを充実させ、学校の教育活動全体と授業とのつながりを意識できるようにしたり、校内で授業づくりのためのツールを共有したりする等のシステムの構築が重要になると考える。

表7 単元案の取組と「新たな教師の学びの姿」との関連

キーワード（令和3年審議まとめより抜粋）	単元案の取組
<p>ア 学び続ける教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル 	<p>○よりよい授業を求め学び続ける教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習指導要領を踏まえた授業づくり ・授業づくりと学習評価の手続きの明確化
<p>イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築 	<p>○日々の授業づくりと学習評価に集中できる環境</p> <ul style="list-style-type: none"> ・カリキュラム・マネジメントの充実 ・授業づくりのためのツールの共有

※ア、イの記号は、内容整理のために筆者が追記したもの。

2 単元研究会の取組

(1) 参加者中心の「単元研究会」

単元研究会は、研究授業を行ったり、事前検討会、事後検討会を行ったりする、いわゆる授業研究会である。授業1単位時間の流れや方法論に留まらず、単元全体を見通した単元構想や評価の在り方、教科等間のつながり等、単元の研究を推進するという観点から、本校では「単元研究会」という呼称を使用している。

本校の単元研究会の特徴は、既存の授業研究会の形式的にとらわれない、参加者を中心としたスタイルにしている点である。これまでの授業研究会では、授業者と参加者との質疑応答を中心とした協議が行われており、質問や感想を言い合うだけになってしまうことも多く見られた。これは、授業者に対する遠慮の気持ちや、参加者自身の意見が出しにくい状況であることの表れであると推測する。授業研究会の本質的な意味は、参加者同士が授業について語り合い、学び合うことにある。こうした本来の授業研究会を実現するためには、参加者の遠慮や不安を解消し、授業について安心して語り合える場や雰囲気を作ることが重要であると考えた。

そこで、本校の単元研究会は、ファシリテーション（2004、堀）の考え方を参考に、場のデザインや発問の工夫、協議の構造化、共有化の方法等、学び合いの場を促進する方法を取り入れ、実践を行うこととした。

まず、基本的な場のデザインとして、「単元研究」をテーマに次の①～③の流れを示し、協議する内容を明確にした。また、ファシリテーター役を設定し、参加者の意見を引き出しながら進める形とした。

- | | |
|-----------------------------------|--------------------------------|
| ①授業での学びの姿を見取る | → <u>学びの質を捉える</u> |
| ②学習評価及び授業改善の実施 | → <u>指導と評価の一体化</u> |
| ③単元の構想の改善及び教科等横断的な視点に立った資質・能力等の視点 | → <u>単元のまとまり等の指導力向上</u> |

単元研究会の流れは、実施要項（資料7）を参照し、主な流れと配慮点を下記に示す。

はじめに、学習評価に関わる授業場面について4～5分程度のビデオにまとめ、授業での子どもの学びの姿を具体的に振り返る。その際、「学びの記録」を作成し、評価規準に照らして事実を見取ることができるようにした（資料8）。また、ビデオ視聴の後は、すぐに2～3人のグループで共有する「共有タイム」を設け、見取れたことを語り合い言語化するようにした（写真1）。

5年経験者研修・中堅教諭等資質向上研修

単元研究会

令和4年11月22日(火)
場所：視聴覚会議室

【日程】
教諭 (16:00～16:35)
途中参加、途中退席もOK。みなさん
でアイデアを出し合い、自分の授業
も考える機会としましょう！

【単元研究会の3つのコンセプト】
本時の授業力向上 単元全体の構成力・授業力向上 枠を越えた力の指導力向上

「教育活動の質」の向上を目指す→日々の単元から始まるカリキュラム・マネジメント

*ファシリテーター・記録

- 1 授業者の自評 (1分)
※ 授業目標に対しての今回の授業に絞った振り返り
- 2 授業での学びの姿を見取る (8分) (視聴2分、VTR4分、共有2分)
※ 目標に対してどう学んでいるのか、対象児童生徒を決め、グループごとに1知識・技能、2思考力・判断力・表現力などの本時の目標の目標で挙げられている内容を、子どもの様子から、その事実を見取る。
※ 宿題等が記載した学びの記録も補助資料に活用する。
- 3 学習評価及び授業改善 (主体的・対話的で深い学びになるための) プレインストームングでのアイデアの出し合い (8分)
※ 時間のため、授業者がある程度、学習評価をし、ビデオを見て、多角的な視点で、複数の目標での学習評価を行う。それを念かし、どのように学ぶとさらに目標 (知識・技能・表現力) が実現できたのか、自由にアイデアを出し合う。
- 4 単元の構想、教科等横断的な視点に立った資質・能力について、プレインストームングでのアイデアの出し合い (7分)
※ 単元のまとめで、授業の振り返り、教育活動の質の向上を考える。
※ 年間指導計画と「本校の教科等横断的な視点に立った資質・能力」を活用する。

以下のポイントで自由にアイデアを出し合う。
○ 単元構成の在り方 ○ 年間指導計画を見て、その関連でのアイデア
○ 教科等横断的な視点に立った資質・能力について (目標にある場合には、学習評価等も踏まえながら)

5 まとめ (2分)
・全体進行者が概観にまとめる。

広い視野で、「授業」を捉え、資質・能力を育成する教員の資質・能力の向上

資料7 「単元研究会」の要項

た？
H: これと、これやめて、これとこれ。
T: これなに？
H: たこ焼き。(お腹ボンボン)
T: 食べたんだね。
H: (食べたと書く) (参加にきていた) 先生みてください。
T: 食べたんだね。
H: 腹いっぱいになった。(お腹ボンボン)
T: 全部一人で食べたの？
H: (Tのホワイトボードに手を伸ばす) わけたい。思った。
T: 分けたいと思ったんだ。誰と？
H: お母さん！
T: 思っただけ？
H: 分けて、Hとお母さん食べた。
T: 分けてお母さんと食べた。伝わりました。丁寧に言ってくれたから分かりやすかった。
H: (連絡帳に) 書いていて。
T: 連絡帳に書いてから。
T: お母さんと分けて食べたって書いてとくか。
H: 書いて。
T: (ホワイトボードに手本を書く)
H: 発表したい。
T: 書いたら先生読んでね。
H: (読みながら書く)
T: 書きました？なんて書いたんですか？
H: お、ははとわけて食べました。おいしかったです。(おしかったと書く)
T: これ読んでみて。
H: また行きたいです。
T: 色々な気持ちあったんだね。伝わりました。しゃべりたかったんだよね。
H: うん。
T: 今日書いた3つ、読んでみよう。

資料8 学びの記録



写真1 共有タイム



写真2 協議の様子

その後、黒板の前に集まり、ファシリテーターが意見を整理していく。その際、参加者はファシリテーターと黒板を取り囲むように立って参加するスタイルにし、立ち話感覚で意見を言ったり、他者の言葉に耳を傾けたりできるように工夫している（写真2）。

単元研究会では、授業者は自評を述べるものの、協議には参加しない。ファシリテーターと授業者が打ち合わせをし、発問のポイント等を工夫しながら参加者の意見を引き出すようにしている。授業者は、単元研究会の話し合いを客観的に聞き、複数のアイデアから効果的だと思われるものについて授業改善を行う。このような仕組みにすることで、相互の遠慮の気持ちをできるだけ排除しながら、相互の学び合いと授業改善につながるようにしている。

単元研究会は、全て任意参加であり、途中参加、途中退出も可としている。参加するかどうかを決めることから、自分で選択・判断し、自己の学びをコントロールしている感覚を持つことが大切であると考え。今年度は、全 12 回の実施で、毎回 10～20 名程度の参加が見られ、各自の業務の都合等も考慮しながら主体的に参加する姿が見られた。

(2) 単元研究会に関するインタビュー

単元研究会について、複数の教師にインタビューを行い、次のような回答が得られた (表 8)。

表 8 単元研究会についてのインタビュー回答

インタビュー：単元研究会の取組をどのように感じているか (メリットや課題)。	
回答者	インタビューの回答 (一部抜粋)
教員 A (20 代)	<ul style="list-style-type: none"> ・研究授業を見ることができなくても、ビデオを見て確認できるため、参加しやすい。 ・いろいろな人の意見や考え方を聞くことができ、とても参考になっている。
教員 B (30 代)	<ul style="list-style-type: none"> ・これまでの事後研究会のイメージと異なり、堅苦しくない雰囲気が良い。 ・立って協議するスタイルがとても新鮮で話し合いに集中しやすい。 ・授業について語り合う場は、とても刺激になっている。
教員 C (40 代)	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもの学びの姿を中心に話し合えるのがよい。 ・様々な人の意見を引き出すファシリテーター役が勉強になる。

インタビューでは、単元研究会について好意的な意見が多く、参加のしやすさを挙げている教員が多く見られた。形式的で儀式的な授業研究会ではなく、任意参加で主体的な参加を促すとともに、対話を重視した構造にしたことが効果的だったと考えられる。

また、本校では、「研究授業の単元研究会」の他、各学年や学習グループで編成されたグループによる「グループ単元研究会」を月に 1 回程度行っている。そこでは、それぞれの教員が単元案を作成し、持ち寄りながら、単元案の作成の仕方や単元構想、学習評価等について情報交換している。単元及び授業に向き合う場、身近な人同士で対話する場、学部を越えていろいろな人と対話し学び合う場を設定し、相互に関連し合う仕組みが、教師の主体的で対話的で深い学びにつながっていると考え (図 13)。

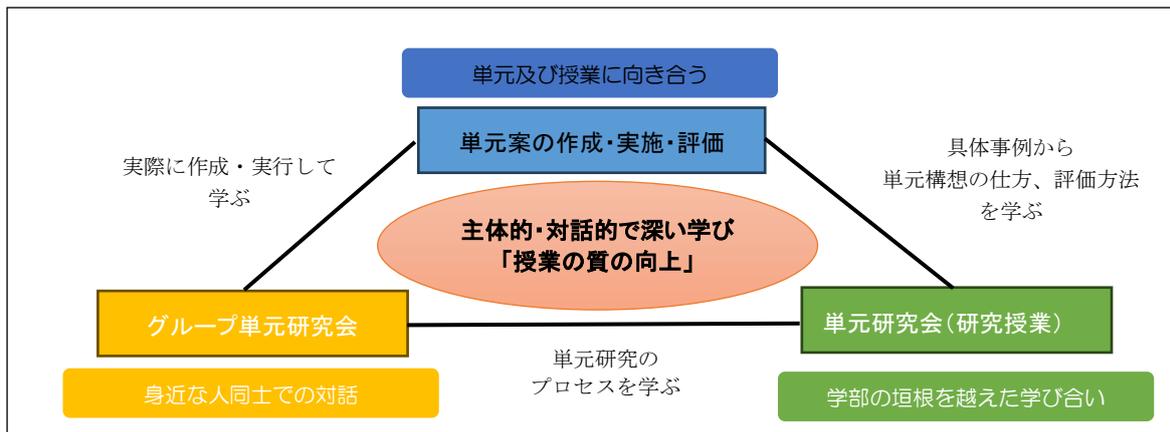


図 13 「単元研究会」による主体的・対話的で深い学び

(3) 「新たな教師の学びの姿」との関連

本校の単元研究会の取組について、令和3年審議まとめ「新たな教師の学びの姿」のキーワードとの関連では、「学び続ける教師」「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」「個別最適な教師の学び、協働的な教師の学びとの関連を取り上げる（表9）。

表9 単元研究会の取組と「新たな教師の学びの姿」との関連

キーワード（令和3年審議まとめより抜粋）	単元研究会の取組
ア 学び続ける教師 ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル	○よりよい授業を探究する教師 ・定期的な授業研究の場 ・モチベーションの維持
イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢 ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築	○自律的に学ぶことができる環境 ・研修を自分で選択・決定できること ・自分で学びをコントロールする感覚
ウ 個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び ・教師自身が、新たな領域の専門性を身に付けるなど、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて強みを伸ばすことが必要 ・他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保するなど、協働的な教師の学びも重視される必要がある	○対話と学び合いの場づくり ・身近な人同士での対話（グループ単元研究会） ・学部の垣根を越えた学び合い（単元研究会・研究授業） ・学び合いを促すファシリテーション（場のデザイン、発問の工夫、協議の構造化、共有化等）

※ア、イ、ウの記号は、内容整理のために筆者が追記したもの。

よりよい授業を探究するためには、個々の学びだけでなく、他者との対話を通じた学び合いが重要である。単元研究会の場が定期的開催されることで、教員相互に刺激し合い、授業づくりに対するモチベーションの維持につながっていると考える。

また、本校の単元研究会は、任意参加であり、研修への参加を自分で選択・決定することができる。参加しなければならないという受け身の学びではなく、自分で学びをコントロールできている感覚が教員の主体的な姿勢につながっていると考えられる。

身近な教師との対話（グループ単元研究会）や学部の枠を越えた学び合い（研究授業・単元研究会）等の「協働的な学び」には、学び合いを促進するためのファシリテーションの考え方や技術が効果的である。「新たな領域の専門性」の一つとして、教員間で効果的に学び合うための知識や技能等を身に付けることも重要になると考えられる。

3 教師寺子屋の取組

(1) 「教師寺子屋」とは

教員の学びのニーズに応じた研修の機会を設定し、校内の教員が講師となって運営する校内研修が「教師寺子屋」である。「教師寺子屋」は、校内の若手教員のアイデアから生まれ、本校独自の研修スタイルとして定着してきている。

教員は、それぞれ経験値や得意・苦手分野が異なり、一人一人が学びたい部分や不安に思っている部分も異なる。特に若手の教員は、学ぶ意欲があるものの、忙しそうにしている同僚に「聞きたくても、聞けない。」「誰に聞いたらよいか分からない。」という思いを持つことがある。また、教職経験の多い教員であっても新しい情報や技術に不安を感じていることがある。そこで、こうした思いを研修部が仲介し、学びの場を提供すれば、教員一人一人の学びたい気持ちに応える研修ができるのではないかと考えた。また、こうした場を通して、教員間の交流が深まり、お互いに聞き合い、学び合える風土づくりにつながるのではないかと考えた。

研修の講師は、研修内容に応じて校内の教員に依頼することとした。年齢や教職年数を問わず校内の様々な得意分野のある教員を「プロ」と称して、基礎・基本について改めて確認したり、これまでの実践事例を共有したりし、楽しみながら学べるようにした。

研修方法としては、①Theme of Learning（テーマオブラーニング）と②Personal Learning（パーソナルラーニング）の2つの種類を設定した（資料9）。①Theme of Learningは、業務上ニーズが高いと推測される内容を研修テーマに設定し、学びたい教員が参加するものである。研修部が全体に研修の場と時間帯を周知し、任意で参加するようにした。②Personal Learningは、個人が学びたい内容と講師をマッチングさせ、個人又は少人数で実施するものである。個人のニーズは、聞き取り又は目安箱に希望の内容を記入し投函する方法にした。双方とも参加者は、所定のノートに名前を記入し、参加の申し

【教師寺子屋】

①Theme of Learning（テーマオブラーニング）

研修テーマがあり、学びたい人が参加する形（月1回程度開催）

* 研修部が、学習上や業務上で先生方が困っている内容をテーマにして設定して実施する。

②Personal Learning（パーソナルラーニング）

個人が学びたい内容とその道のプロをマッチング。同様の悩みがある人や学びたい人が参加する形（不定期開催）

* 個人の悩みや学びたい内容を研修部が仲介役としてマッチングさせ、個人の負担なく実現する。

* 参加希望者はノートに名前を記入する。

資料9 教師寺子屋の種類

込みをするようにしているが、途中参加も可とし、興味を持った人は、いつでも参加できるようにしている。

(2) 教師寺子屋の実施内容（令和5年度）

①Theme of Learning では、単元案の作成や学習評価、生徒指導、キャリア教育等、校内研究のテーマに関わる内容を実施した。また、②Personal Learning では、自立活動、人との交渉術、ICT活用、毛筆の指導方法、発達検査等、多様なテーマで実施した（表10）。2月に3講座を予定しているため、令和5年度は、全15講座の実施となる見込みである。

実施に当たっては、参加者が研修内容に興味を持てるよう、開催を知らせるチラシを工夫するとともに、掲示板や校内チャットを活用し、随時、確認ができるようにした（資料10）。

表10 令和5年度に実施した教師寺子屋（令和6年1月現在）

期 日	内 容	種 類
5月31日（水）	単元案の作成について	①テーマ
6月21日（水）	学習評価の仕方について	①テーマ
7月14日（金）	自立活動について	②パーソナル
7月24日（月）	調和的な発達の支援①（生徒指導について）	①テーマ
7月28日（金）	人との交渉術を学ぶ	②パーソナル
8月22日（火）	年に1回は組織学！OJL研修	①テーマ
9月6日（水）	ロイロノートを使ってみよう	②パーソナル
10月27日（金）	Everyone Can Create～イノベーション動画を創ろう～	②パーソナル
11月21日（火）	調和的な発達の支援②（キャリア教育について）	①テーマ
11月28日（火）	書き初め指導のポイント～上手に書けなくても理論が分かれば指導はできる～	②パーソナル
12月20日（水）	発達検査について～学校にある発達検査やS-M社会生活能力検査の確認～	②パーソナル
1月18日（木）	視線入力について～AIと視線入力と私～	②パーソナル



資料10 教師寺子屋のチラシ

(3) 「教師寺子屋」の実践事例

令和5年度の教師寺子屋の取組から一部の実践事例を取り上げ考察する。

○5月31日「単元案の作成について」

本校で活用している「単元案」の作成方法やポイントについて教師寺子屋を開催した（参加者22名）。講師は、単元案の作成と活用を実践してきた本校教員2名（20代と30代）が務めた。

研修は、単元案のポイントの他、実際にパソコンを持参し、自分の単元案を作成しながら個別相談に応じるワークショップ形式で進められた。参加者からは、「実際にやってみないとわからない

いことが多かった。またこうした研修をしてほしい。」「講師の先生が3個作ると作るのが速くなると言っていたので、やってみようと思います。」等の感想があった（写真3）。

転任してきた教員の他、改めて単元案について学びたいという教員が参加し、実際に単元案を作成しながら、講師や周囲の教員に作成方法や疑問点について相談しながら進めていた。校内全体で進めていることであっても、理解度や活用の程度は、それぞれである。個々の疑問を解消しながら学び合う場があることで、単元案に取り組んでみようとするきっかけになったと考える。



写真3 教師寺子屋「単元案の作成について」の様子

○7月28日「人との交渉術を学ぶ」

保護者や地域の方、関係機関等、大人同士の対応の仕方について、企業研修を参考にして学ぶ教師寺子屋を開催した（参加者17名）。講師は、一般企業の営業職の経験のある教員が務めた。

研修は、講師が企業で経験した体験談や対人スキルとそのポイント、自己理解のためのエゴグラム診断のワークショップ等を行った。参加者からは、「社会人として必要なスキルは、独自で学ぶことが多かったが、改めて参考になる研修だった。」「自分を客観視する機会になった。相手のタイプが様々であることを前提に丁寧に対応していきたいと思った。」等の感想があった（写真4）。



写真4 教師寺子屋「人との交渉術を学ぶ」の様子

教員の中には、様々な職歴や経験を持った人材がいる。こうした人材の強みを生かして、学び合いの場をつくることのできるのも教師寺子屋ならではの利点であるとする。こうした機会があることで、教師側の視点だけにとどまらず、視野を広げることの重要性を感じるきっかけになると考える。

○10月27日「Everyone Can Create～イリュージョン動画を創ろう～」

iPad内の標準アプリの活用方法を学ぶ教師寺子屋を開催した(参加者14名)。講師は、長年ICTを活用した授業実践を行ってきた専門性の高い教員が務めた。

研修は、カメラアプリやプレゼンテーションアプリ、動画編集等を使った授業実践の事例紹介や動画編集アプリの機能を使ったワークショップを行った。参加者からは、「カメラアプリの使い方のイメージが持てました。授業でやってみたいと思いました。」「動画編集を実際にやりながら学ぶことができたのがよかった。」等の感想があった(写真5)。

ICTの活用は、教員間でも非常に関心が高く、この事例の他にもロイロノートの使い方や視線入力装置、AIの活用等の講座を開催した。一人一台端末が配備され、教員も各自の端末で授業活用を行っている状況であるが、より効果的な活用を求めて試行錯誤している段階である。ICTに関する学びの場は、広がってきているものの、校内での学びの場があることで、学校全体でのスキルアップにつながると考える。また、教師寺子屋を通して、専門性の高い教員に助言をもらったり、ICT活用について教師間で相談し合ったりすることにもつながると考える。



写真5 教師寺子屋「Everyone Can Create～イリュージョン動画を創ろう～」の様子

(4)「新たな教師の学びの姿」との関連

教師寺子屋の取組について、令和3年審議まとめ「新たな教師の学びの姿」のキーワードとの関連では、「学び続ける教師」、「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」、「個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び」との関連を取り上げる(表11)。

教師寺子屋は、校内人材の強みを生かすことで、教員個々の「知りたい、学びたい。」に応える多様な研修内容を設定することができた。教師寺子屋での学びをきっかけに相談し合える関係づくりにもつながった。個々の学びだけでなく、相互に高め合う場や関係づくりが「学び続ける教師」の基盤になると考える。

また、単元研究会同様、任意参加の研修であり、研修を自分で選択・決定できることが「主体的な姿勢」につながるものであると考える。

教師寺子屋は、多様な研修内容があり、自分で必要な研修を選ぶことができる研修である。教員一人一人が自分のニーズに応じて選択できることが「個別最適な教師の学び」につながると考える。また、「協働的な教師の学び」を促すためには、体験を通して学ぶワークショップ型の学びや対話の場の設定等が重要であったと考える。

表 11 教師寺子屋の取組と「新たな教師の学びの姿」との関連

キーワード（令和3年審議まとめより抜粋）	教師寺子屋の取組
ア 学び続ける教師 ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル	○教員個々の「知りたい、学びたい」に応える多様な校内研修 ・校内人材の強みを生かす ・相談し合える関係づくり
イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢 ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築	○自律的に学ぶことができる環境 ・研修を自分で選択・決定できること ・自分で学びをコントロールする感覚
ウ 個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び ・教師自身が、新たな領域の専門性を身に付けるなど、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて強みを伸ばすことが必要 ・他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保するなど、協働的な教師の学びも重視される必要がある	○教員個々のニーズに応じた学び ・多様な研修内容 ・自分に必要な研修を選ぶこと ○学び合いの場の工夫 ・体験を通して学ぶワークショップ型の学び ・対話の場

※ア、イ、ウの記号は、内容整理のために筆者が追記したものである。

4 OJL研修会の取組

(1) OJLによる職場風土の改善

「OJL」とは、On the Job Learning の略で、一般的に職場内教育を指す「OJT」のTrainingをLearningに替えたものである。遠藤・小野寺（2007）は、OJLを「職場における、共感に基づく自律的相互学習を通じて、職場風土を改善し、個人個人と組織の成長を促す学習プロセス」と定義し、時代の変化に対応する組織の在り方としてOJLの重要性を述べている。

OJLは、OJTのような教育や訓練を中心とした人材育成から、自律的な学び合いと職場風土の改善へとシフトチェンジしていくことを示している。VUCA（Volatility：変動性、Uncertainty：不確実性、Complexity：複雑性、Ambiguity：曖昧性）と言われる変化の激しい時代においては、受け身ではなく自律的、主体的に学び続けることや、同僚性、協働性の発揮による組織運営がますます求められることとなり、それは学校組織も同様である。

本校では、この OJL の考え方を基盤とし、学校の組織づくり、そして人材育成の要となる研修体制に生かすこととした。遠藤・小野寺 (2007) は、ピーター・M・センゲ (1990) の提唱した「学習する組織」の考え方を踏まえ、OJL を促進するための 10 の要素を提唱している (資料 11)。この 10 要素について学び、学校風土として浸透させていくことが個人と組織の成長につながると考え「OJL 研修会」を開催している。

＜ピーター・M・センゲのオリジナル5要素＞	
①自己マスタリー	・継続的に私たち個人のビジョンを明確にし、それを深めることであり、エネルギーを集中させること、忍耐力を身に付けること、そして、現実を客観的に見ること
②共有ビジョン	・私たちが創り出そうとする未来の共通像であり、組織全体で深く共有されるようになる目標や価値観や使命のこと
③システム思考	・現実の複雑性を理解するために、ものごとのつながりや全体像を見て、その本質について考えること
④メンタル・モデル	・私たちがどのように世界を理解し、どのように行動するかに影響を及ぼす、深く染みこんだ前提、一般概念であり、あるいは創造やイメージを指す
⑤チーム学習	・グループで一緒に、探求、考察、内省を行うことで、自分たちの意識と能力を協働で高めるプロセスのこと
＜遠藤・小野寺 (2007) によるプラス5要素＞	
⑥ポジティブシンキング	・物事をポジティブに前向きに考えること ・人や物事に潜むプラスの側面を見出すこと
⑦遊び心・ユーモア・笑い	・仕事の中に遊び心・ユーモア・笑いを取り入れること
⑧ソーシャル・キャピタル	・人々の協調行動を促進することにより、その社会の効率を高める働きをする社会制度であり、具体的には「信頼」「互酬性の規範」「社会的ネットワーク」などのこと
⑨エンパワーメント	・権限委譲したり、相手を信頼して意志決定などを任せて、責任意識の自覚ややる気を引き出したりする働きかけのこと
⑩OJL コーチング	・個人および組織の潜在能力を最大限に引き出し、課題解決や創造的な取組に向けて行われる全ての働きかけ

資料 11 OJL を促進するための 10 要素

(2) 個人と組織の成長を考える「OJL 研修会」

OJL 研修会は、OJL の提唱者である東京保健医療専門職大学准教授小野寺哲夫氏を講師に招き、令和 2 年度から毎年開催している。令和 5 年度は、下記のテーマで実施した。

令和 5 年度相馬支援学校ミドルリーダー研修・OJL 研修会

日時：令和 5 年 8 月 22 日 (月) 9:30～12:10

会場：相馬支援学校視聴覚会議室

○第 1 部「ミドルリーダーが学校を動かす～知っておきたい組織学～」

(主な内容) OJL の背景、学習する組織の 10 要素モデル、マインドセット、心理的安全性、チーム・カラー・コラム描画テスト (演習)、6 つの帽子メソッド (演習) 等

○第 2 部「共に感じ、考え、学び合い、創造し続ける学校を目指して～成果を上げるチームの条件とは

(主な内容) システム・インスパイアード・リーダーシップ、関係性システム知性 (RSI)

講義は、組織学に関する最新情報や心理学アプローチに基づく演習を含めた内容となっており、自己分析やグループでの対話等、参加者同士で楽しみながら学ぶことができた (写真 6)。第 1 部では、OJL の背景から OJL の 10 要素モデルの概要についての講義であった。「リーダー

は特定の人の役割ではなく、誰もがリーダーのように働くことが重要である。」「物事を前向きに捉えるしなやかマインドセットが成果につながる。」「脅威やリスクを感じずに、安心して何でも言い合えるチームが心理的安全性の高いチームである。」等、個人や組織の在り方についてのポイントを学んだ。

第2部では、OJLの10要素の中の「システム思考」を中心により専門的な内容についての講義であった。「システム・インスパイアード・リーダーシップは、個々の構成単位ではなく、それぞれの間の関係性システムに着目するアプローチである。」「意見や立場の対立は変化のエンジンである。」「思いを発信すること、それを受け止めることができる組織が成長する。」等、組織全体の関係性に注目することや、対立を恐れず個々が思いを発する環境や働きかけが重要であることを学んだ。



写真6 OJL 研修会の様子

参加者の感想からは、組織学の視点を学び、個々の課題解決への意欲が喚起された様子が見えがえた(資料12)。組織学を学ぶことは、あるべき組織の姿や個々の成長との関係についての視点を持つことにつながる。毎年、OJLの研修を積み重ねてきたことで、校内での認識が広がってきている。定期的なOJL研修により、その価値を共有していくことが、個人と組織の成長を目指した職場風土の改善につながっていくと考える。

OJL研修会が一日限りの一過性の研修にならないよう、日常の業務の中や校内研修の機会に意図的に働きかけていくことが必要であると考えます。

(参加者の感想) ※一部抜粋

- ・入門編の話は、例年聞いてきて、回数を重ねるごとに理解できてきた。
- ・組織学等の視点から学校づくりを考える研修は数が少なく、私自身の課題解決に取り組む中で生かしたいことが多い、大変有意義な研修でした。
- ・教員というプロの仕事である以上、学び続けることを意識したいと思った。今までは自分ひとりの成長のために研修する事に重きを置いていたが、組織の一員として自分の役割を十分に発揮するために必要な研修をするという考え方を意識していこうと思った。
- ・ネガティブな意見は個人の意見でもあるがその組織の意見でもある、創造的緊張や多様性が許容される組織が望ましい、心理的安全性が保障されていない環境下では、良いものが生まれない等の内容に、とても勇気付けられた。

資料12 OJL 研修会の参加者の感想 (一部抜粋)

(3) 「新たな教師の学びの姿」との関連

0JL 研修会の取組について、令和3年審議まとめ「新たな教師の学びの姿」のキーワードとの関連では、「学び続ける教師」、「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」、「個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び」との関連を取り上げる（表12）。

表12 0JL 研修会の取組と「新たな教師の学びの姿」との関連

キーワード（令和3年審議まとめより抜粋）	0JL 研修会の取組
ア 学び続ける教師 ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル	○0JLの視点を持つ ・時代の変化に対応するための組織の在り方 ・個人と組織の成長を促す
イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢 ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築	○職場風土づくり ・心理的安全性の高いチーム ・リーダーシップの発揮
ウ 個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び ・教師自身が、新たな領域の専門性を身に付けるなど、全教員に共通に求められる基本的な知識技能というレベルを超えて強みを伸ばすことが必要 ・他者との対話や振り返りなどの機会を教師の学びにおいて確保するなど、協働的な教師の学びも重視される必要がある	○組織学に関する知識・技能を身に付ける ・0JLの10要素 ○学び合う場づくり ・定期的な研修会の開催 ・演習を取り入れた学び合い

※ア、イ、ウの記号は、内容整理のために筆者が追記したものである。

0JL 研修会は、時代の変化に対応するための組織の在り方や個人と組織の成長を促すためのアプローチ方法を学ぶ研修である。0JLの視点を持つことは、組織と自己の在り方を振り返ることにつながる。組織と自己の関係に着目し、課題解決への取り組みを続けていくことが、学び続けることにつながると考える。

また、心理的安全性が高いチーム、一人一人がリーダーシップを発揮できる職場風土は、仕事に対する前向きな姿勢を促すことから、個々の主体的な姿勢や学びの継続性につながる。校内研修で組織学を学ぶ続けることで、職場風土の重要性を教員間で共有し、改善に努めることができると考える。

児童生徒に対する授業や指導に関する知識・技能の他、0JLの10要素等の組織学の知識・技能を身に付けることは、これからの教師に必要な専門性の一つになる。具体的な知識や技能を学び、組織や相互関係に配慮したリーダーシップを発揮することが重要であると考えられる。

0JL 研修会が定期的開催されることで、本校教員の学びが積み重なっている。演習を取り入れた学び合いは、体験的な理解が得られるとともに、教員同士の関係性を深める機会にもなっている。協働的な学びの場の確保が、職場風土の改善の一助になると考える。

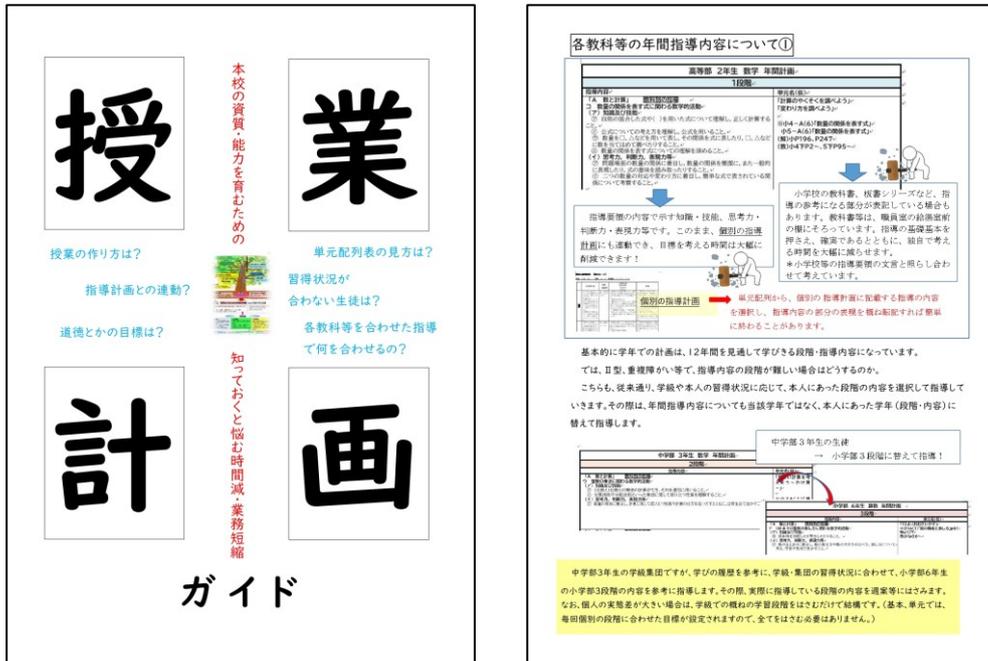
5 個人で学べる環境整備

(1) 授業づくりと学習評価のための校内資料

校内研修体制の一環として、授業づくりと学習評価の手続きを個々に確認できる校内資料の作成と共有を行っている。校内研修の場で学んだことを一過性のものにしないうえにも、日頃の授業づくりで迷ったとき等、必要に応じて個人で学べる資料が必要である。本校で作成し、全教員で共有している資料を下記にまとめる。

○授業計画ガイド

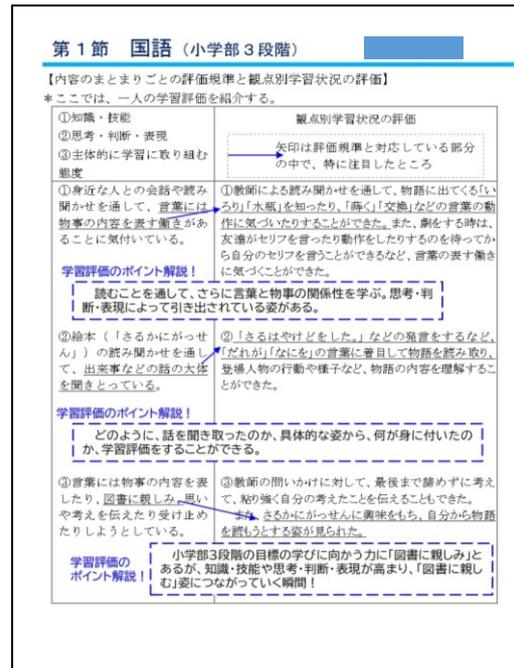
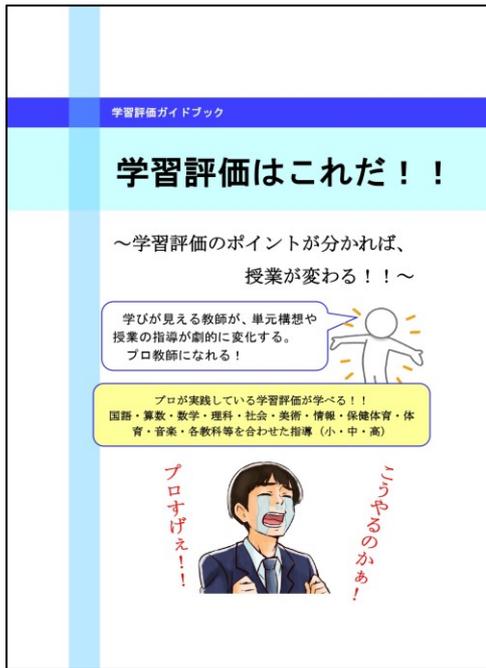
授業計画ガイドは、主に授業づくりの手続きや配慮点を示した資料である（資料13）。知的障害特別支援学校における授業づくりの考え方、年間指導計画や単元配列表、個別の指導計画との連動、教科等横断的な視点に立った資質・能力との関係等、具体的に記載している。各教員は、授業計画ガイドを基準に単元案の作成と授業実践に取り組んでいる。



資料13 授業計画ガイド

○学習評価ガイドブック

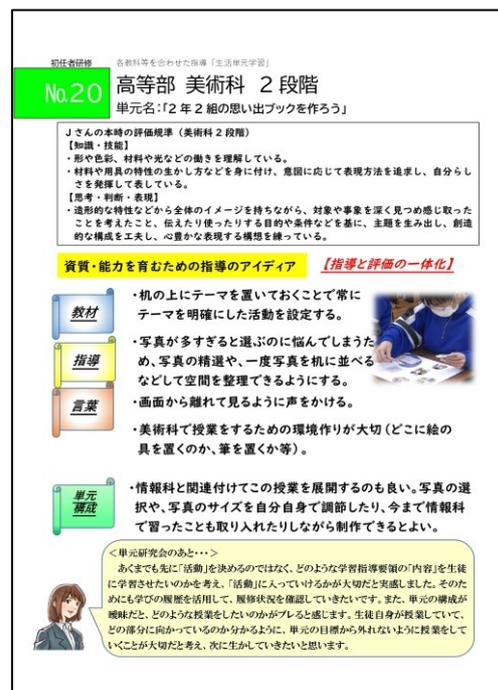
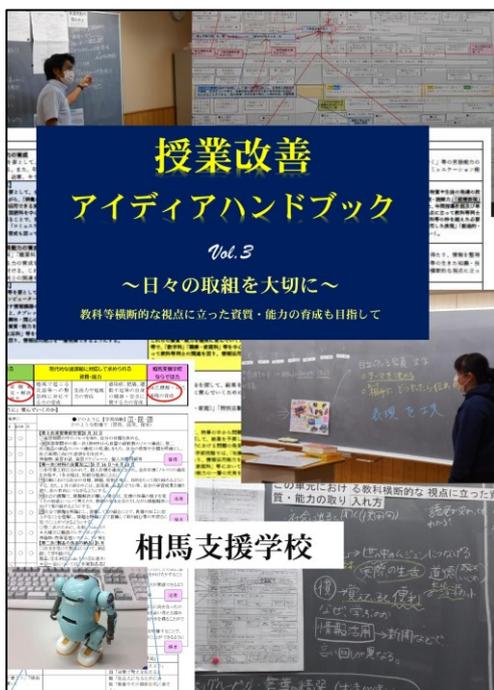
学習評価ガイドブックは、主に学習評価の手続きや配慮点を示した資料である（資料14）。知的障害特別支援学校の学習評価は、平成31年3月29日初等中等教育局長通知より、観点別学習状況の評価を取り入れることとなり、評価の考え方に変更があった。観点別学習状況の評価に慣れていない教員も多いことから、内容のまとまりごとの評価規準の作成方法や具体的な評価の書き方を例示した。実際の教員の実践と記入例に解説を加え、分かりやすく示している。



資料 14 学習評価ガイドブック

○授業改善アイデアハンドブック

授業改善アイデアハンドブックは、単元研究会で協議した授業改善のアイデアを、授業者自身の振り返りとともにまとめた資料である(資料 15)。各授業 A4 判 1 枚にまとめ、「教材」「指導」「言葉」「単元構成」等のポイントや授業者の振り返りを記載している。知的障害各教科等の指導事例として本校ホームページにも掲載し広く公開している。



資料 15 授業改善アイデアハンドブック

(2) 研修資料の環境整備

本校では、職員室の一角に研修スペースを設け、研修に関する資料類をすぐに手に取ることができるようにしている。こうした研修スペースの確保も研修意欲を喚起する環境として重要な役割を果たしていると考えられる。研修資料について下記にまとめる。

○単元案ファイル

単元案は、本節の1で述べた取組である。校内研究で作成した単元案をまとめ、各学部、教科等ごとにファイルに綴り、過去の資料を参考にできるようにしている。研修スペースの棚に設置し、いつでも手に取れるようになっている（写真7）。

また、単元案は校内サーバーでデータの共有もされており、各教員がすぐに検索できるようになっている。



写真7 単元案ファイル

○各種教科書、指導書、図書資料

研修スペースには、各種教科書、指導書、図書資料を整備している（写真8）。知的障害者用の文部科学省著作教科書に加え、小学校の検定教科書等も整備し、双方を参考に授業づくりが行えるようにしている。

図書資料では、各教科の進め方や板書の参考例等が書かれた図書を使用する教員が多く見られ、授業アイデアに関するニーズが高いことが伺える。

○研修案内等の情報共有

研修スペースには、校内研修に関わる案内の他、校外で開催される研修会の案内等を掲示している。最近では、校内チャットとの併用を行いながら情報提供を行っている。

校内チャットは、各教員個々の端末に情報が届くとともに、後から実施要項等の内容確認ができるため、教員からも好評である（写真9）。



写真8 図書資料を参考に学ぶ様子



写真9 校内チャット

(3) 「新たな教師の学びの姿」との関連

個人で学べる環境整備の取組について、令和3年審議まとめ「新たな教師の学びの姿」のキーワードとの関連では、「学び続ける教師」、「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」、「学びの成果の可視化と組織的共有」、「デジタル技術の活用」との関連を取り上げる（表13）。

個人で学べる環境整備は、情報に触れることができるとともに、必要な情報を自分で取りに行くことのできる環境であると考え。学べた経験が次の学びの意欲につながることから、必要となる研修資料の充実と整備を継続していくことが必要であると考え。

また、近年のデジタル技術の進展によって、情報共有が容易になり、学校現場でのICT活用が広がっている。本校では、単元案データ等を共有したり、タイムリーな研修案内をしたりする等の取組を進めてきた。個人で学べる環境の整備に向け、さらにICT活用の可能性を探っていく必要があると考える。

表13 個人で学べる環境整備と「新たな教師の学びの姿」との関連

キーワード（令和3年審議まとめより抜粋）	個人で学べる環境整備
<p>ア 学び続ける教師</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル 	<p>○必要な情報を自分で取りに行く</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修資料 ・研修案内
<p>イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢</p> <ul style="list-style-type: none"> ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築 	<p>○研修資料の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元案の蓄積 ・授業のアイデア
<p>カ 学びの成果の可視化と組織的共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学びの成果が可視化され、個人の学ぶ意欲を喚起できていること ・学びの成果が組織において積極的に活用されていること ・教師の学びを全国的な観点から質が保証されたものとして証明する仕組みが構築されていること 	<p>○実践事例の蓄積と共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元案ファイル ・授業改善アイデアハンドブック
<p>キ デジタル技術の活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習履歴の管理や学びの成果の可視化等を電子的に行うこと ・豊富で質の保証された学習コンテンツをいつでもどこでもオンラインで学ぶことができるようにすることなど 	<p>○ICTを活用した情報共有</p> <ul style="list-style-type: none"> ・単元案データの共有 ・タイムリーな研修案内

※ア、イ、カ、キの記号は、内容整理のために筆者が追記したものを。

6 オンラインコンテンツの活用

(1) オンラインコンテンツを活用した校内研修

現在、教育センターや民間企業等の教育機関による様々な教師向けオンラインコンテンツが配信されており、教師の学びの場は広がっている。そのうち、オンライン研修動画は、全国の様々な専門家の講義をいつでもどこでも聞くことができ、関心のあるテーマや学びのニーズに応じて選択して学ぶことができる。しかし、本章第1節のアンケート結果にもあるように、自主研修として研修動画を見たことがある本校教員は4割にとどまり、利用経験がないという教員は少なくない。その理由として、経験がないため、利用の仕方やよさが分からず、研修方法としての選択肢にならないことが考えられる。

そこで、オンライン研修動画を活用した校内研修を行い、研修内容の充実を図るとともに研修動画を使った学びの経験を広めようと考えた。教師寺子屋の研修機会を使い、15名程度の少人数での校内研修を実施した。研修動画は、NITS 教職員支援機構の配信している「校内研修シリーズ」を使用した。

NITSの「校内研修シリーズ」は、教員の資質向上に必要な多様なテーマの研修動画があり、研修の進め方の例示や研修資料等も整備されているため、すぐに活用することができた。「生徒指導」や「キャリア教育」について、教員間で基礎・基本を学ぶとともに、学校の課題解決に向けた協議を行うことができた（写真10）。

参加者からは、「分かりやすく、背景や基礎を知ることができた。分からないところは後でもう一度使用して確認したい。」「NITSの動画は初めて見た。こうした機会があると参加しやすい。」「動画だけでなく、教員同士で学び合えるのがよかった。」等の感想が聞かれた。

(使用した動画コンテンツ)

NITS 教職員支援機構校内研修シリーズ (YouTube)

No.129「生徒指導Ⅰ」、No.130「生徒指導Ⅱ」、No.41「キャリア教育の実践」



写真10 オンラインコンテンツを活用した校内研修の様子

(2) 虹とおひさま「指導者のためのオンラインナビゼミ」の利用

教員向けのオンラインコンテンツは多くあるものの、特別支援学校の教員向けのものはあまり多くない。特に、知的障害の程度が重度である児童生徒への指導や言語や数量等の初期段階の指導についてのものが少ない。

虹とおひさま「指導者のためのオンラインナビゼミ」は、言語や数量の初期段階の指導や自立活動に関する研修動画が豊富で、本校のニーズに合致していることから、有料の団体登録をして利用している。

国語、算数の指導については、具体的な教材の作成の仕方や指導方法のポイント等を分かりやすく示している。また、自立活動に関する内容として、摂食指導や手指の巧緻性を高める指導、実際の事例紹介等がある。認知発達や実態把握の方法について学べる講義もある等、特別支援学校の教員に参考となるコンテンツがある。本校教員は、それぞれの端末から自分のタイミングで視聴することができるようになっている。

本校教員からは、「具体的な教材や指導の考え方が参考になる。」、「自立活動の指導方法について実際に見て学べるのがよい。」、「理論と実践の双方を学べるのがよい。」等の感想が挙げられている。

虹とおひさま「指導者のためのオンラインナビゼミ」

URL <https://nijitoohisama.com/navizemi/>

(3) 「おすすめオンラインコンテンツ」の情報発信

本校研修部では、特別支援学校の教員向けに「おすすめオンラインコンテンツ」を作成し、チャットで情報提供を行っている（資料16）。

オンラインコンテンツは、自分に必要な情報が得られるサイトを各自で検索する必要がある。どんなコンテンツがあるかを知らなければ、検索や活用にはつながらないことから、本校教員が活用できるコンテンツとその概要をまとめて情報提供を行うこととした。

研修動画のほか、プリントやワークシートを利用できるサイト等の紹介も行っている。定期的に情報発信を行い、オンラインコンテンツに関する情報に触れることのできる環境づくりが、個人のニーズに応じて学べる環境整備の一つになると考える。



資料16 おすすめオンラインコンテンツ

(4) 「新たな教師の学びの姿」との関連

オンラインコンテンツの活用について、令和3年審議まとめ「新たな教師の学びの姿」のキーワードとの関連では、「学び続ける教師」、「教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」、「質の高い有意義な学習コンテンツ」、「デジタル技術の活用」との関連を取り上げる（表14）。

オンラインコンテンツを活用する利点は、個人のニーズに応じた内容を選べること、個人のタイミングで学べることである。オンラインコンテンツを学びの選択肢にすることで、個々の課題やニーズに応じた学びの可能性が広がるとともに、自主研修の姿勢や習慣にもつながると考える。

本校では、オンラインコンテンツの活用を推進する取組として、校内研修での活用や定期的な情報提供に努めてきた。学び方は人それぞれであるが、学びの選択肢の一つとしてオンラインコンテンツに関する情報に触れ、活用のきっかけを作ることが大切であるとする。

また、本校では、特別支援学校教員向けの情報をまとめ、「おすすめ」等の情報提供を行ってきた。個々のニーズに応えるコンテンツの把握し、適切なオンラインコンテンツを選択できるようにすることも大切であるとする。

教員によってオンラインコンテンツの活用経験や ICT スキルは異なる。そのため、一人一人がより取り組みやすくなる工夫が必要である。オンラインコンテンツで学ぶ機会を作ったり、個々のスキルに応じたサポート体制を構築したりする必要があるとする。

表 14 オンラインコンテンツの活用と「新たな教師の学びの姿」との関連

キーワード (令和3年審議まとめより抜粋)	オンラインコンテンツの活用
ア 学び続ける教師 ・教師は学び続ける存在であることが強く期待されている ・時代の変化が大きくなる中で常に学び続けていくことが必要 ・主体的に学び続ける教師の姿は、児童生徒にとっても重要なロールモデル	○オンラインコンテンツを学びの選択肢にする ・個々の課題やニーズに応じた学び ・自主研修の姿勢や習慣
イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢 ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという教師の主体的な姿勢 ・一人一人の教師が安心して学びに打ち込める環境の構築	○オンラインコンテンツの活用を推進するための環境 ・校内研修での活用 ・適切な情報提供
オ 質の高い有意義な学習コンテンツ ・明確な到達目標と適切な内容を備えていること ・体系性をもって位置付けられ、レベルも整理されていること ・質の高い学習コンテンツが豊富に提供されていること	○適切なオンラインコンテンツの選択 ・個々のニーズに応えるコンテンツの把握 ・特別支援学校教員向けの情報提供
キ デジタル技術の活用 ・学習履歴の管理や学びの成果の可視化等を電子的に行うこと ・豊富で質の保証された学習コンテンツをいつでもどこでもオンラインで学ぶことができるようにすることなど	○ICTを活用した学びの充実 ・オンラインコンテンツで学ぶ経験 ・個々の経験やスキルに応じたサポート体制

※ア、イ、オ、キの記号は、内容整理のために筆者が追記したもの。

第4章 研究のまとめ

第1節 総合考察

1 「新たな教師の学びの姿」と校内研修との関連の整理

第3章では、教員アンケート及び「新たな教師の学びの姿」と校内研修6つの取組との関連について整理してきた。本章では、これらの結果を総合した考察を行う。表15は、「新たな教師の学びの姿」のキーワードと校内研修6つの取組の関連をまとめた表である。表中の●印は、校内研修との関連で取り上げたキーワードを表したものである。また、右側の箇条書きされた言葉は、キーワードごとの関連事項の言葉をまとめたものである。

表15 「新たな教師の学びの姿」と校内研修との関連のまとめ

キーワード (令和3年審議まとめより抜粋)	校内研修6つの取組						第3章第2節で整理した関連事項のまとめ
	1 単 元 案	2 単 元 研 究 会	3 教 師 寺 子 屋	4 O J L 研 修 会	5 個 人 で 学 べ る 環 境	6 オ ン ラ イ ン コ ン テ ン ツ	
ア 学び続ける教師	●	●	●	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ○よりよい授業を求め学び続ける教師 ○よりよい授業を探究する教師 ○教員個々の「知りたい、学びたい」に応える多様な校内研修 ○OJLの視点を持つ ○必要な情報を自分で取りに行く ○オンラインコンテンツを学びの選択肢にする
イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢	●	●	●	●	●	●	<ul style="list-style-type: none"> ○日々の授業づくりと学習評価に集中できる環境 ○自律的に学ぶことができる環境 ○職場風土づくり ○研修資料の充実 ○オンラインコンテンツの活用を推進するための環境
ウ 個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び		●	●	●			<ul style="list-style-type: none"> ○対話と学び合いの場づくり ○教員個々のニーズに応じた学び ○学び合いの場の工夫 ○組織学に関する知識技能を身に付ける ○学び合う場づくり
エ 適切な目標設定・現状把握、積極的な「対話」							※個々の目標設定及び管理職等との対話の内容のため、校内研修との関連には含めなかった。
オ 質の高い有意義な学習コンテンツ						●	○適切なオンラインコンテンツの選択
カ 学びの成果の可視化と組織的共有					●		○実践事例の蓄積と共有
キ デジタル技術の活用					●	●	<ul style="list-style-type: none"> ○ICTを活用した情報共有 ○ICTを活用した学びの充実

「ア 学び続ける教師」及び「イ 教師の継続的な学びを支える主体的な姿勢」

アとイは、全ての取組と関連付けられた。この2つのキーワードは、「継続的な学び」という点で重なる概念であることから、関連事項をまとめて考察する。

本校の校内研修は、授業づくりと学習評価が中核であり、よりよい授業を探究するための環境をいかに構築するかを最も重要視している。そのための方策として、①単元案を中心としたシステムを整備し、授業づくりと学習評価に注力できるようにしたこと、②研修機会や研修資料等の環境を整備し、自律的に学ぶことができるようにしたこと、③OJLの視点を学び、心理的安全性やリーダーシップ等、職場風土の重要性を共有できるようにしたことが挙げられる。このことから、継続的に学び続けるための環境は、授業に関わるシステムの整備と職場風土づくりが鍵になるのではないかと考える。

「ウ 個別最適な教師の学び、協働的な教師の学び」

ウは、単元研究会、教師寺子屋、OJL研修会との関連が見られた。「個別最適な教師の学び」は、教員の実態に応じて学び方が個別化されることや、個々のキャリア形成に向けて学ぶ内容を自分で選択していくことを指す。本校の校内研修の取組では、多様な研修内容や研修スタイルを用意し、自分で選択できるようにしていることが挙げられる。また、「協働的な教師の学び」は、対話や学び合いの場を設定するとともに、ファシリテーションやワークショップ等の学び合いを促す工夫が重要になると考える。

「エ 適切な目標設定・現状把握、積極的な『対話』」

エは、個々の目標設定や管理職等との対話に関わるものであることから、本研究においては、校内研修との関連を取り上げなかった。しかし、自分の現状を把握するとともに目標設定をし、管理職と対話しながら必要な研修を選定していくことは、「継続的な学び」や「個別最適な教師の学び」の実現には非常に重要な取組である。本校でも今年度より研修履歴の記録や管理職との対話が進められている。教員の目標設定と研修の選定の在り方についても今後研究が必要であろう。

「オ 質の高い有意義な学習コンテンツ」

オは、教員の研修機関等で開発される学習コンテンツやそのシステムを指している。校内研修においては、個々のニーズに応じて適切な学習コンテンツを選択できる環境づくりが重要になると考える。今回の研究では、オンラインコンテンツの活用との関連を取り上げ、校内研修で活用したり、校内の教員に向けた情報提供をしたりする等の取組を行った。オンラインコンテンツの経験を広げ、自己の学びの選択肢とすることが重要であると考えられる。

「カ 学びの成果の可視化と組織的共有」

カは、学びの成果を可視化することで個人の学ぶ意欲を喚起することや、学びの成果が組織で生かされることを指す。本校では、単元案の蓄積や授業改善アイデアハンドブックの作成を通して、個々の取組の可視化と共有に努めてきた。この他にも、校外研修の報告や個人研究の発表等も含まれる。個人の学ぶ意欲の喚起につながる可視化の工夫や場づくりが重要であると考えられる。

「キ デジタル技術の活用」

キは、学習履歴の管理や学びの成果の可視化等を電子的に行うこと、豊富で質の保証された学習コンテンツをいつでもどこでもオンラインで学ぶことができるようにすること等を指している。本校の取組では、ICT を活用した情報共有やオンラインコンテンツの活用を推進してきた。ICT の活用に関する知識やスキルには個人差があることから、校内でのサポート体制や気軽に相談し合える風土づくりが重要であると考ええる。

2 校内研修の取組の要点と配慮事項

(1) 授業づくりと学習評価に注力するための環境づくり

本校の校内研修の中核は、単元案と単元研究会である。単元案を中心としたカリキュラム・マネジメントのシステムを整備したことで、日々の授業づくりと学習評価に注力ができるようになった。また、単元研究会を通して、児童生徒の学びの姿から学び、授業改善や教育課程全体を見通した教育活動の改善を図るという風土づくりにもつながったと考える。

研修のための研修に陥らないように留意し、日々の授業の課題解決のための学びとなるような校内研修の場づくりをすることが大切であると考ええる。

(2) 自律性と主体性の尊重

本校の校内研修は、任意参加の研修を多く取り入れている。また、個人で学べる環境に留意し、必要な情報を取り入れることができるような環境整備や情報提供を行っている。これらは、教員個々の自律性と主体性を尊重するものであり、自分で学びをコントロールしている感覚が、次の学びへの意欲につながると考えている。また、個々のキャリア形成に向けた自律的、主体的な学びが「新たな領域の専門性」を身に付け、個々の強みを伸ばすことにつながると考える。

単に自律性、主体性に委ねるだけではなく、定期的な校内研修の場を設定し、そこでの対話や学び合いによって互いに刺激し合うきっかけをつくることが大切だと考える。自律的、主体的、対話的に学びに向かう学校風土が、教員の「継続的な学び」、「主体的な姿勢」を支えると考ええる。

(3) 対話と学び合いを促す場と手立ての工夫

本校の取組には、対話と学び合いを促す場づくりと手立ての工夫が重要であったと考える。ファシリテーションの考え方を取り入れた単元研究会やワークショップ形式の教師寺子屋等、対話と学び合いが活性化する研修は、参加した教員にとっての満足度が高く、次の学びの意欲につながっていると考える。

また、教員が、ファシリテーター役や講師役を務めることは、対話や学び合いを促すための知識や技能を身に付けることにつながり、教師の資質・能力の向上にもつながっていると考える。

第2節 今後の取組に向けて

1 本校の校内研修の課題

(1) 持続可能なシステムづくり

本校は、人事異動によって毎年多くの教員が入れ替わっている。構成メンバーが変わることで、今後、単元案や単元研究会、教師寺子屋等のシステムの維持・継承が難しくなっていくことが考えられる。取組が形骸化しないように、各取組の意味や意図について教員間で確認し、より使いやすく持続可能なシステムへと評価・改善を積み重ねていくことが課題であると考えます。

(2) 個々の探究的な学びの更なる充実

本研究では、教員個々のニーズに応じた学びの場の環境整備や協働的な学びの充実に向けた取組を検証することができた。一方、個々のキャリア形成に向けた目標設定や学びの成果の可視化、新たな領域への探究等、個別最適な教師の学びに関して課題があると考えます。校内研修においては、基礎・基本の定着を基盤としつつ、個々のより探究的な学びを支援するための方策についての検討が必要であると考えます。

2 研修体制に関する課題

(1) 個々の目標設定と研修の選定の在り方

今年度より新たな研修体制として、研修履歴の作成と管理職との対話による研修の選定が進められている。本研究では十分に扱うことができなかったが、個々の現状把握や振り返りが学びの意欲や成果の実感につながることから、個々の目標設定と研修の選定の在り方が重要であると考えます。全国の動向を踏まえて、本校の取組に生かしていきたい。

(2) 特別支援学校教員向けの学習コンテンツの充実

オンラインで利用できる学習コンテンツは年々広がっているが、特別支援学校教員向けの学習コンテンツはまだ数が少ない。特に、本校では、知的障害の程度が重度である児童生徒への指導、言語や数量の初期段階の指導、自立活動の指導事例についての研修ニーズが高く、こうした学習コンテンツについて、今後も適切に情報を収集し、校内で情報提供ができるようにしていきたい。

(3) 個別最適な学びの仕組みと時間の確保

研修には、勤務時間内に行う職務研修と勤務時間外に行う自主研修がある。アンケートの結果から、一部の教員は自主的に研修の場を作っているものの、多くの教員は、勤務時間内の研修が主となることが推定される。今後、教員一人一人の個別最適な学びとして、オンラインコンテンツ等を活用し、個別に学ぶ場合にも、勤務時間外の自主研修だけに委ねるのではなく、勤務時間内に実施できる環境が必要である。働き方改革を進めつつ、個別最適な学びができる仕組みと時間の確保を進めていきたい。

引用文献・参考文献

- 1) 文部科学省 (2022) : 教育公務員特例法及び教育職員免許法の一部を改正する法律等の施行について (通知)
- 2) 中央教育審議会 (2021) : 「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す, 個別最適な学びと, 協働的な学びの実現～ (答申) (中教審第 228 号)
- 3) 中央教育審議会「令和の日本型学校教育」を担う教師の在り方特別部会 (2021) : 「令和の日本型学校教育」を担う新たな教師の学びの姿の実現に向けて (審議まとめ)
- 4) 中央教育審議会 (2022) : 「令和の日本型学校教育」を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～「新たな教師の学びの姿」の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～ (答申) (中教審第 240 号)
- 5) 文部科学省 (2017) : 特別支援学校幼稚部教育要領小学部・中学部学習指導要領
- 6) 文部科学省 (2018) : 特別支援学校学習指導要領解説総則編 (幼稚部・小学部・中学部)
- 7) 文部科学省 (2018) : 特別支援学校学習指導要領解説各教科等編 (小学部・中学部)
- 8) 文部科学省 (2019) : 小学校, 中学校, 高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について (通知)
- 9) 文部科学省 (2020) : 特別支援学校小学部・中学部学習評価参考資料
- 10) 堀公俊 (2004) : ファシリテーション入門、日本経済新聞出版社
- 11) 遠藤哲哉・小野寺哲夫 (2007) : 自治体経営における学習する組織—福島県内自治体のデータを用いた組織戦略と組織心理学的観点との統合—、青森公立大学経営経済学研究(13)1、35-52
- 12) 遠藤哲哉・小野寺哲夫 (2008) : 自治体経営における「学習する組織」尺度の基礎研究—ソーシャル・キャピタルを含む 10 因子モデルから O J L 研修の有効性を実証的に検討する—、青森公立大学経営経済学研究(13)2、43-61
- 13) ピーター・M・センゲ (1990) : 学習する組織—システム思考で未来を創造する、英治出版
- 14) 小田理一郎 (2017) : 「学習する組織」入門—自分・チーム・会社が変わる持続的成長の技術と実践、英治出版
- 15) 福島県特別支援教育センター (2020) : もっといいチームになるヒント—O J L—
- 16) 虹とおひさま (2023) : 指導者のためのオンラインナビゼミ
<https://nijitoohisama.com/online-navizemi/> (アクセス日: 2023 年 12 月 28 日)
- 17) NITS 独立行政法人教職員支援機構 (2023) : 校内研修シリーズ
<https://www.nits.go.jp/materials/intramural/> (アクセス日: 2023 年 12 月 28 日)
- 18) 福島県立相馬支援学校 (2022) : 令和 3 年度研究紀要
- 19) 福島県立相馬支援学校 (2023) : 知的障害特別支援学校のカリキュラム・マネジメントと単元研究「学習指導要領の着実な実施を目指して」、ジアース教育新社

謝辞

この度、このような研究の機会を与えて下さり、研究助成をしていただきました公益社団法人みずほ教育福祉財団様に深く御礼申し上げます。また、本研究を特別支援教育研究助成論文として御推薦いただいた独立行政法人国立特別支援教育総合研究所の皆様に深く感謝申し上げます。

本研究の推進に当たっては、本校教職員全体で取り組んで参りました。しかし、本校校内研修の取組自体は、今年度だけでなく、令和元年度から始まる本校移転に伴う学校改革に携わった多くの教職員、指導助言をいただきました関係者の礎の基に培われたものであります。関係の皆様これまでの御尽力に深く感謝を申し上げます。また、組織改革に向けた取組として令和2年度より行ってきたOJL研修に当たっては、東京保健医療専門職大学リハビリテーション学部准教授小野寺哲夫様に継続的に指導助言をいただきましたことを深く御礼申し上げます。

変化の激しい時代にあって、「令和の日本型学校教育」の実現とともに、それを支える「新たな教師の学び」の整備と充実は、どの学校にあっても喫緊の課題となっております。教師の働き方改革が進められる中、本来教師が注力すべき業務とそのための研修に各教員が確実に取り組むことができるよう、時間の確保を含めたシステムづくりを進めていく必要があります。本校の取組は、まだまだ改善の余地があり、本研究を起点に改善し続けていきたいと考えております。新しい情報を取り入れ続け、関係者や本校教職員の声に耳を傾け、よりよい「新たな教師の学びの姿」を探究していく所存です。

本校の取組を支えていただきました全ての皆様に、心より感謝と御礼を申し上げ謝辞といたします。

巻末資料①：資料2 単元案1枚目（資質・能力の明確化）

相馬支援学校 単元案



本校の学校教育目標		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
基礎的・基本的な知識・技能を習得し、活用できる力	自ら考え、協働し、課題を解決していく力	自ら進んで考え、学ぼうとする力
高等部		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
自立と社会参加のために必要な基礎的・基本的な知識・技能を習得し、活用できる力	自分の考えを持ち、他者を理解し、課題を解決していく力	自ら進んで考え、学ぼうとする力

【資質・能力の育成のための教育活動として】

理科 単元案	単元・題材名	「流れる水の働きと土地の変化」
--------	--------	-----------------

【単元・題材での目標】 知的障害者教科等編（上）（高等部） 理科1段階B地球・自然

知識・技能	思考力・判断力・表現力等	学びに向かう力・人間性等
流れる水の働き、気象現象の規則性についての理解を図り、観察、実験などに関する初歩的な技能を身に付けるようにする。	流れる水の働き、気象現象の規則性について調べる中で、主に予想や仮説を基に、解決の方法を考える力を養う。	流れる水の働き、気象現象の規則性について進んで調べ、学んだことを生活に生かそうとする態度を養う。

知的障害者教科等編（上）（高等部） 理科1段階B地球・自然 流れる水の働きと土地の変化

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
規 準 内 容 の ま と ま り ご と の 評 価	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 ・川の上流と下流によって、川原の石の大きさや形に違いがあることを理解している。 ・雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わり、増水より土地の様子が大きく変化する場面があることを理解している。 ・観察、実験などに関する初歩的な技能を身に付けている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水の働きについて調べる中で、流れる水の働きと土地の変化との関係についての予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・流れる水の働きと土地の変化についての事象・現象に進んで関わり、学んだことを学習や生活に活かそうとしている。

単元構想のためのメモ欄

- *校庭を活用して実験に取り組む。
- *トレイ、洗淨びん等を使った実験に取り組み、実体験を使って、災害で、前回の単元とのつながりも考える。
- *予想、実験方法を考える、検証、結果、考察等の見方・考え方を働かせて授業が展開するように構想する。その際、授業の展開が上記の流れになるように、発問、板書等を事前に考え、生徒の思考が流れるようにする。
- *各教科等の学習の文脈の中で、教科等横断的な視点に立った資質・能力（言語能力）が横断的に育成・発揮されること

【教科等横断的な視点に立った資質・能力】

学習の基盤となる 資質・能力		現代的な諸課題に対応して求められる 資質・能力		相馬支援学校 ならではの力	
言語能力	情報活用 能力	問題発見・解決 能力	地域で起る災害等への緊急時に 対応する力の育成	生活力や地域力の育成 感染症、肥満、運動不足等の自身の健康・安全に関する力の育成	自己理解・自己 実現の育成

「何を、いつ、どのように」育んでいくのか

展開	時数	知・技	思・判・表	主	横断的な力	●どのように【学習活動】 どのような指導で（習得、活用、探究）
第一次	1		○			●川の上流・中流・下流の様子の写真を見て様子の違いに気付く。 【主】：実際に身近な川を取り上げながら、川の上流や中流、下流によって、川の様子が違うことに気づき、これから調べて行こうとする見通しをもてるようにする。
	2	○				ある ●川のおよそ上流・中流・下流による違いをまとめる。 【対】：最初は、自分達で調べた後、その後、友達とグループになって話し合う場を設けながら、気づきをグループ事にまとめていくようにする。
第二次	2	○	○		問	●流れる場所と水の関係について話し合い、流れる水の働きを予想する。 【主】：写真等を使ったり、身近な校庭等の映像を使ったりしながら、どんな働きがあるのかを予想していくようにする。【対】：予想したことをどのように、検証していくのか、実験方法を考え、表現していく。
	3		○	○		●斜面に水を流して、流れる水の働きについて調べる。 ・斜面に水を流し、流れる水にはどのような働きがあるのかを調べることができる。【主・対】：各グループで実験をしながら、個人での観察、グループでの実験結果を話し合いから、グループにワークシートにまとめていくようにする。
	4	○	○			●流れる水の働きについてまとめる。 ・流れる水にはどのように働きがあるのかを実験をもとにしてまとめることができる。準備物：実験セット、ワークシート
	6 7	○	○	○		●学んだことをもとに、川を観察し、流れる水の働きについて調べる。 ○川の水が増えるとどのような災害が起きるのかを予想する。
まとめ	8		○	○	優	●流れる水の働きについてまとめ、自分なりの考えをもつ。 【深】：これまでの学びから、自分の身近な生活場面でどのように生かしていくかを考える場面を設定する。

【他の単元とのつながり】

	「過去の単元」7月 ○教科等横断的な教育内容の検討・考察	「現在の単元」9月 ○教科等横断的な教育内容の検討・考察	「今後の単元」10月 ○教科等横断的な教育内容の検討・考察
社会科	「我が国の国土と地形」		
総合	「南相馬市の防災について」		

【内容のまとめりごとの評価規準と観点別学習状況の評価】

<p>① 知識・技能 ② 思考・判断・表現 ③ 主体的に取り組む態度</p>	<p>観点別学習状況の評価</p>
<p>①知識・技能 ・流れる水には、土地を浸食したり、石や土などを運搬したり堆積させたりする働きがあることを理解している。 ・川の上流と下流によって、川原の石の大きさや形に違いがあることを理解している。 ・雨の降り方によって、流れる水の速さや量は変わり、増水より土地の様子が大きく変化する場面があることを理解している。 ・観察、実験などに関する初歩的な技能を身に付けている。</p> <p>②思考・判断・表現 ・流れる水の働きについて調べる中で、流れる水の働きと土地の変化との関係についての予想や仮説を基に、解決の方法を考え、表現している。</p> <p>③主体的に取り組む態度 ・流れる水の働きと土地の変化についての事物・現象に進んで関わり、学んだことを学習や生活に活かそうとしている。</p>	<p>①知識・技能 ・実験の結果から「水の流れる力が強くなると、土地を削る力が強くなるのではないか。」と考え結論を出すことができた。 ・川の上流は「川の流れる速さが早く、岩がゴツゴツとして大きい」、下流は「全体的に丸みを帯びて、小さく平べったい。」と考えるなど、上流、中流、下流の石の形の違いを理解することができた。 ・台風などの大雨の時の川の映像を見て、「川が増水し中洲や河原なども川の一部になる。」と答えるなど、土地の様子の変化を理解することができた。 ・流れる水の様子を調べる実験において、比較検討するためには、変化させない条件として「山の傾斜」変化させる条件として「水の量」と考えるなど、条件を制御して実験に取り組むことができた。また、観察する時には、事実を客観的に見取る必要があることを理解することができた。</p> <p>②思考・判断・表現 ・流れる水の働きはどんな力があるか調べる学習においては、川の水が増える大雨や台風の時には「土地が普段よりも削れ、川の幅が広がり、川の近くの物が流されてしまう。」と予想を立てることができた。また、「砂で山を作ることは前回と同じ。」「初めは前回の実験と同様に水を流し、その後水の量を増やして比べて考える。」と実験方法を考えることができた。</p> <p>③主体的に取り組む態度 ・実験の中で曲がりくねった川の様子から、水の量を増やすとカーブの部分が決壊するのではないかと考えたり、カーブの部分に堤防が必要ではないかと考えたりすることができた。実際の川と関連付けながら川が増水すると「堤防を削ってしまい川が氾濫し災害に繋がってしまう。」と実社会と結び付けて考えていた。</p>
<p>各教科等の学習の文脈の中で、これらの資質・能力が横断的に育成・発揮された姿 <教科等横断的な資質・能力>：問題発見・解決能力 ○実験の中から問題を発見し解決する力の育成を図っていく。 【評価】実験から、「川が増水すると、カーブの部分などから決壊してしまう。だから土を盛って堤防を作る必要がある。」と考えるなど、問題を発見し解決しようとしていた。 <教科等横断的な資質・能力>：地域で起こる災害等への緊急時に対応する力の育成 ○地域の実態に応じた各種災害に対する「緊急時に対応する力」の育成を図る。 【評価】下流に行くほど川幅が広がることが分かり、さらに「大雨などで増水すると川が決壊し危険が増すため、堤防が必要となる。だから下流に近い学校の近くの川は堤防が高いんだ。」と表現するなど、実社会と結びつけながら考えることができた。</p>	

巻末資料④：資料5 単元配列表

学年	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
国語	「話してみよう」・「読んでみよう」・「書いてみよう」★③	「聞いたこと」をメモしてみよう★③	「知能を説く」文章に書いてみよう★③	「伝えたいこと」を文章に書いてみよう★③	「読んでみよう」・「感動を表現しよう」・「読んでみよう」★③	「読んでみよう」・「感動を表現しよう」★③							
数学	1000より大きい数	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	「1000より大きい数」	
社会	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	我が国の地理や歴史	
理科	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	岩石の不思議	
音楽	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	「歌を聴いてみよう」	
図画	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	「描いてみよう」	
総合	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	「総合学習」	
体育	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	「体育」	
家庭科	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	「家庭科」	
英語	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	「英語」	
特別活動	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	「特別活動」	
習字	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	「習字」	
道徳	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	「道徳」	
その他	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	「その他」	

5年経験者研修・中堅教諭等資質向上研修

単元研究会

令和4年11月22日(火)

場所：視聴覚会議室

【日程】

■■■■ 教諭
■■■■ 教諭 (16:00~16:35)

途中参加、途中退席もOK。みなさん
でアイデアを出し合い、自分の授業
も考える機会としましょう！

【単元研究会の3つのコンセプト】

本時の授業力向上

単元全体の構成力・授業力向上

枠を越えた力の指導力向上



「教育活動の質」の向上を目指す→日々の単元から始まるカリキュラム・マネジメント

*ファシリテーター・記録 ■■■■

1 授業者の自評(1分)

* 授業目標に対しての今回の授業に絞った振り返り

2 授業での学びの姿を見取る(8分) (黙読2分、VTR4分、共有2分)

学びの質を捉える

* 目標に対してどう学んでいるのか、対象児童生徒を決め、グループごとに①知識・技能、②思考力・判断力・表現力などの本時の個別の目標で挙げられている内容を、子どもの様子から、その事実を見取る。

* 経験者等が記録した学びの記録も補助資料に活用する。

3 学習評価及び授業改善(主体的・対話的で深い学びになるための)ブレインストーミングでのアイデアの出し合い(8分)

指導と評価の一体化

* 時短のため、授業者がある程度、学習評価をしておき、ビデオを見て、多角的な視点で、複数の目線での学習評価を行う。それを生かし、どのように学ぶとさらに目標(資質・能力)が実現できたのか、自由にアイデアを出し合う。

4 単元の構想、教科等横断的な視点に立った資質・能力について、ブレインストーミングでのアイデアの出し合い(7分)

単元のまとまりで深める!

* 単元のまとまりで、授業の深まり、教育活動の質の向上を考える。

* 年間指導計画と「本校の教科等横断的な視点に立った資質・能力」を活用する。

枠を越えた力を深める!

New!!

以下のポイントで自由にアイデアを出し合う。

- 単元構成の在り方 ○年間指導計画を見て、その関連でのアイデア
- 教科等横断的な視点に立った資質・能力について(目標にある場合には、学習評価等も踏まえながら)

5 まとめ(2分)

・全体進行者が簡潔にまとめる。

広い視野で、“授業”を捉え、資質・能力を育成する教員の資質・能力の向上

相馬支援学校 研修部
~Theme of Learning~

“単元案の作成”のポイント

実際に作りながらコツをつかもう！
個別相談を実施！

忙しい中でも指導と評価の一体化
を図り、授業に向き合うプロ教師！



やれば授業が上手くなる！



授業がどんどん変わる！
魔法の単元案を作り、
授業と生徒を変えて行くプロ教師！

その他、実践している先生たちが個別に相談に応じます！

日時：令和5年5月31日（水）

16：00～16：40

場所：視聴覚会議室

☆参加希望の方は、研修部のノートに記入してください。

単元案の作り方が不安な方、多忙な中でもやりき
るコツを聞きたい方、実践者の話を聞いてよりパワ
ーアップしたい方等、学びたい人集まれえ！！

